

弘前藩の刑法典 (十二) — 寛政律 —

付 『要記秘鑑』三十四 (一)

橋 本 久

目 次

はじめに

一 安永律

付1 『御刑罰御定』(安永律)

〔第六号〕
〔第十三号〕

付6 『要記秘鑑』三十三 安永四年八月二十六日条

〔第二十号〕

二 寛政律

(一) 『御刑法書之写』

〔第七号〕

(二) 『寛政律』(その一)

〔第八号〕

(三) 『寛政律』(その二)

〔第十一号〕

(四) 『寛政律』(その三)

付2 『隠商過料定牒』

付3 『人別方御用取扱條例』

『人別調方取扱條例』

〔第十三号〕

(五) 『寛政律』(その四)

補訂1 『藩法史料集成』所収「弘前藩御刑法牒」

〔第十四号〕

(六) 『寛政律』(その五)

付4 『諸取引御触書』 『公義御書付留』 『公義御触書留』

付5 (参考) 『公事訴訟取捌』

(七) 『寛政律』(その六)

(八) 『寛政改正御刑法帳』

(九) 『寛政改正 刑律』

付6 『要記秘鑑』三十三

〔第十七・十八・二十号〕

弘前藩の刑法典 (出)

料

(十) 『寛政九年 刑法』

付7 『要記秘鑑』三十四

(十一) 以下

資 三 文化律

二 寛政 律

(十) 『寛政九年 刑法』

凡 例

一 弘前市立弘前図書館所蔵本「G K三二・五、二三」を用いた。

一 字体、字配りはできる限り、原本に従った。異体字・変体仮名については、必ずしも原本に従ってはいない。

一 原本の行末が次行に及んだ場合は、行末を示すため、「」を加えた。118条の「は行頭を示す。

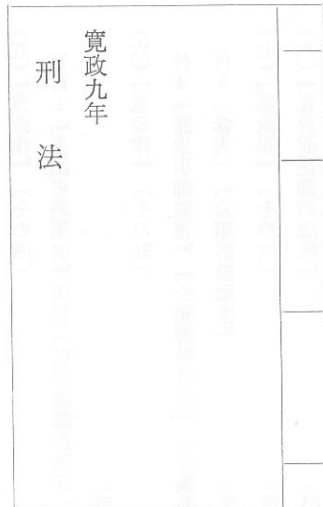
一 原本には見られないが、各項目の前に適宜行間を空けた。
一 原本の丁数・表裏を各終行末に「」で示した。

一 便宜上、(二)~(九)に倣い、各項目に一、二、三…、各条文に仮番号1、2、3…等の数字を付した。ただし、条文番号の18~21については省く。

〔本 号〕

〔本号以下〕

一 他に適宜書き加えた箇所は「」で示した。
〔表紙〕



(縦 24.1cm 横 17.1cm)

〔朱印〕
福本藏書

覺

此度御刑法御改正被 仰付ゆニ付沙汰仕仕処歴代之制法を致損益相立儀ニ付律之輕重宜敷義理

共ニ正敷御座ゆ得共當時ニ比ゆ得者 一体律重故

明律ニ而答刑ニ相當部ハ大方當時戸メ^{〔七〕}て相濟ゆ

振合ニ御座ゆ猶又刑法も違ひ間其^{〔七〕}但ニ而ハ難用依之

當時通例之刑名を以明律之格ニ隨ひ差等相立

專其義理ニ寄輕重相分申_レ尤右之内
 公儀御定ニ相抱_レ儀ニ而是迄之御法ニ而俄ニ輕重難相
 立分ハ与得沙汰仕斟酌加減仕_レ間此末御刑法御
 沙汰御下之節ハ若此度相立_レケ条之内ニ洩_レ儀
 御座_レハ、右之趣を以明律參考致罪之輕重無之様
 被 仰付_レ様奉存_レ則此度相立_レ御刑法名目与明
 律刑名と相當_レ差等左ニ申上_レ也

〔一オ〕

戸メ	明律答刑	鞭刑	明律杖刑
五日	十	三	六十
十日	二十	六	七十
十五日	三十	九	八十
二十日	四十	十二	九十
三十日	五十	十五	一百
鞭刑追放	明律杖刑	徒刑	明律流徒
十八所拂	一年杖六十	半年鞭三十	二千里杖一百
二十三里	一年半杖七十	一年鞭三十	二千五百里杖二百
二十四五里	二年杖八十	一年半鞭三十	三千里杖三百
二十七七里	二年半杖九十	死刑	明律死刑
三十 十里	三年杖一百	斬	絞
但大場御擣		獄門	斬秋後

一 火刑 (火刑ハ火付を極て重科ニ相立_レ公儀御定ニ付明律ニ相當なし) 一 磔 斬即決

定例御刑法名目

一 一戸メ五 五日 十日 十五日 廿日 三十日

但 (子弟或ハ奉公人之數戸メ難相成ものハ右之日數之通過料人夫或ハ一日六十文積を以過料錢差出事) 〔一オ〕

点羽 (戸メ之儀ハ是迄日數幾日ニ相成_レ間御免被仰付_レ様申上_レ居_レ得共以来幾日戸メ被 仰付_レ様初日數記申上_レ様官政八辰八月何濟) 〔マ、ニ、七九〇〕

二 二鞭刑五 三 六 九 十二 十五

三 三鞭刑追放五 十八所拂 廿三里 廿四五里 廿七七里

三十 十里大場御擣 但 (追放ハ鞭十八已上ニ得共其子細ニ寄罪の仕方ニ寄難差置ものハ鞭數ニ不抱追放可致事)

四 四一徒刑三 半年鞭三十 一年鞭三十 一年半鞭三十

但 (徒刑之ものハ銅鉛山江 差遣鞭刑之上年限之通但 苦使可致事)

五 五二死刑四 斬 獄門 磔 火刑 〔二ウ〕

料

六

一 贖刑 〔書入〕「シヨク
贖タカラ
シニ
アカフ 以財贖罪也

6

鞭三ハ 過料三貫六百元 鞭 六ハ 過料四貫貳百元
同九ハ 同 四貫八百文 同十二ハ 同 五貫四百文
同十五ハ 同 六貫文 同十八ハ 同 拾貳貫文

同廿一ハ 同 十五貫文 同廿四ハ 同 十八貫文

同廿七ハ 同 二十貫文 同三十ハ 同 二十四貫文
徒刑半年ハ 同 三十貫文 徒刑一年半ハ 同 三十六貫文

同一年ハ 同 三十三貫文 死刑ハ 同 四十貳貫文
右過料ハ老幼癡疾之類刑ニ不可行并過_(七)て人を殺し或ハ

疵付たる類ハ相當之過料_(七)て罪を贖可申事

7

過料之もの若貧困_(七)て上納難相成ものハ銅鉛山江
差遣し一日六十文之積を以夫役ニ使ひ可申事若又〔三才〕

老幼癡疾之類夫役ニも難相立ものハ其身_(七)窄舍之上

一年或ハ二年_(七)て用捨可致事

七 一五逆之事

8

惡逆 祖父母父母を致打擲或ハ殺んと謀并伯叔父姑兄弟
姉妹母方之祖父母を殺夫を殺る者之事

9

不道 一家之内死罪ニ非る者三人を殺并人之支骸を切
解きむこく切害致者之事

10

大不敬 御宗廟御_(七)飭物并御召物_(七)を盜取者之事

11

不孝 祖父母父母之事を祈_(七)へ或ハ惡口し父母扱不宣
難_(七)澁せしむる者之事

〔三ウ〕

12

不義 支配之もの頭分之者を殺弟子として師匠を
殺もの、事

八 一老幼癡疾之事

13

年七十以上十五才以下并癡疾之者死罪以下贖_(七)て
用捨可致事八十以上十才以下死罪を犯者ハ

上聞之上時宜御沙汰可被仰付事盜賊并人_(七)疵を
付_(七)る者贖を出させ可申事其余之罪ハ御擣無之

九十以上七才_(七)已下ハ死罪をも刑を不可加事

罪を犯たる節未_(七)老疾無之罪顯達たる節老疾
但 ならハ老疾を以沙汰可致事幼少之節老疾

壯年ニ至顯達たらハ幼少之例を以て沙汰可致事

〔四オ〕

14

癡疾之事惣而人事ニとつ連_(七)る片輪病人を云なり

馬鹿もの乱心之類茂癡疾と可致事

九

一科人ハ首徒_(七)を可分事

15

貳人以上申合犯罪之節ハ其内趣意相企_(七)る者を首と

致須事其余ハ徒と致須事徒之者ハ首ら罪一等を
可減事尤本文ニ同類不殘と有之ハ首徒之差別是
なき事

一〇一老人ニ而二罪有之事

16 凡^(凡)二罪共ニ一度ニ顯連する節ハ重方一ヶ条を以罪を定る
事若一罪先ニ顯連既ニ刑を加ふる後外之罪顯連たる
節ハ輕方并同等之罪ハ御沙汰ニ不及若跡ニ顯連たる
科重起時^(き)ハ沙汰直し前罪之鞭數差引殘鞭數斗
刑を加る事 ^(四ウ)

一一一五軒組合連座ニ可致ヶ条之事

17 隠田畑 隠津出 盜杣 博奕之宿 隠賣買
右ヶ条之内罪を犯たる者有之節組合之者ハ本人之
罪ニ相當を以過料ニ直し四軒ら差出可申事

但 (組合四軒ニ不滿もの四軒之割合を以不足分者
御用捨之事)

一二一科人自身申出る者之事

22 惣而惡事致ふる者之事未^レ顯連ざる以前ニ自身 ^(五オ)

申出るに於てハ其罪御用捨之事

但 人を疵付或ハ物ニ寄不可償品并姦通之類不許事

23 竊盜ハ手段^(等)ニ而人之財物を取其後過を悔て自身と
本人ニ返須者ハ上へ申出ると同く其科可許事

一三一親族ハ罪を隠ても御用捨之事

24 父母兄弟伯叔父姑夫婦之間罪有之相隠ても御咎無之事

但 ^(逃)其事洩れ去志むる共不可罪家来主人之為イ
^(隠)隠も是又同前也其外妻之父母娘之智夫之兄
弟相應節ハ平人ら罪三等可申事

一四一親族輕重之事

25 本文ニ祖父母と有之ハ高祖曾祖同様之事孫と有 ^(五ウ)

之ハ曾孫玄孫同様之事嫡孫承祖ハ父母と同様嫡母
養母ハ実母と同様之事

一五一罪可減者累減を得事

26 譬ハ罪を犯たる者首と徒と有之時其徒之者ハ罪一
等を減ふる上其者外ニ又可減子細有之時ハ又幾等
茂段々減可申事

料

一六一 婦人犯罪之事

27 婦人之犯罪ハ鞭十五以上ニ相當節ハ鞭十五切て残る數

ハ「過料ニ而贖可申事婦人之鞭刑ハ襦半之上より打

申マ逼マぐ事

但 姦淫之類ハ衣を去直ニ可打事

〔六オ〕

資

竊盜之類ハ入墨まて可許事

一七一 不義之財物を取捌之事

29 財物之上まて罪を犯たる者本人相手共ニ罪有之時者

其財物没納可致事若相手方罪有之本人罪無之時ハ

其財物本人江可返事

30 財物之没納可致物并本人江可相返物既ニ費し用たる

節贖可令出事若科人身死て品物費用之節ハ

取立ニ不及事

一八一 同類之内出奔有之片口ニ相成い者之事

31 同類之内卷人ハ出奔致し卷人召捕たる節其者出奔

致しる者を本人之旨申出別ニ證人無之時ハ其者ハ徒

と致し刑を加可申事其後出奔致たる者を召捕て糺

〔六ウ〕

明致したる節取初之者本人ニ相違無之時ハ首と致し
残る刑を可加事

一九一 罪科加減之事

32 加とハ本罪之上江猶加て重く致事也減とハ本罪之上ニ

猶減て軽く致事也

但

減る節ハ四段之死罪三段之徒各一等と致減る事也
鞭刑ニ至而ハ三鞭ツ、之一等を減可申事加る節者
一段毎ニ一等と致事猶加罪ハ徒一年半鞭二十限ニ
而「加て死ニ不可入加て死ニ可入ものハ其ケ条よ
其誤「有之事 〔七オ〕

二〇一 關所之事

33 關所之事鞭三十以上專利欲ニ抱る科ハ其利欲之輕

重ニ寄田畑或ハ家屋敷家財ハ關所可申付事重

罪ニ茂利欲ニ不抱者ハ律之ケ条出しる外ハ關所不

可致事

二一 取押物之事

34 惣而禁を犯たる物を取押し儀其懸合役筋之者ニ

無之節ハ其品直ニ其取押たる者ニ被下置其役筋ニ而

取押しる節ハ押物之多少寄御賞被下置其品者

没納ニ可致事

〔書入〕
ボツラホル
没シツム
ムサホル
モツククス
」

〔七ウ〕

二二一人を謀て殺たる者之事

35 宿意を以て謀て人を殺する者其張本人ハ獄門加擔

手傳致する者ハ斬罪加擔斗ニ而手傳不致者ハ徒一

年半鞭三十

36 疵付たる斗ニ而不死時ハ張本人ハ斬罪加擔手傳ハ徒

一年半鞭三十

37 謀殺之事情時ハ疵付不申共張本人ハ鞭三十加擔手

傳之者ハ鞭十五

38 右之張本人譬ハ其場ニ不臨共死たる節其身手ニ

懸殺も同然疵付する節ハ手ニ懸疵付するも同然

之事加擔之者ハ其場ニ不臨時ハ其場ニ臨する罪〔八オ〕

一等可許事

39 若依之財宝を取ものハ強盜之律ニ隨ヒ張本人加擔

人之差別無之不殘磔

但〔同行之内ニ而も財を分ぐるものハ謀殺之律ニテ
可捌事〕

二三一謀て親を殺たる者之事

40 謀て親を殺ものハ男女ニ不抱肆之上鋸引婦人夫之
父母を殺も同然

但〔鋸引之者ハ罪之次第建礼致シ於往來道路肆
事三日往來之者勝手次第鋸引致させ右日限相濟
まで鋸引致者無之節ハ引廻之上磔〕

41 殺逆之事既ニ行時ハ譬疵付不申共磔

42 親類之者妻子不殘遠追放家屋敷家財闕所

但子ニ而茂別居之ものハ御用捨之事

43 親殺之者於自滅ハ死體塩漬之上可行磔刑

二四一親族を謀殺之事

44 祖父母を殺んと謀既ニ行者獄門殺須時ハ引廻之上磔

但母方之祖父母も同様之事

45 婦人夫之父母并夫を殺するも右同様之事

46 伯叔父姑兄姉を謀殺既ニ行時ハ徒一年鞭三十疵付

たる時ハ獄門殺時ハ磔

〔47 脱〕

48 伯叔父姑之甥姪を謀殺致兄姉之弟妹を謀殺せる

時ハ斬罪

〔九オ〕

二五一謀て主人を殺る者之事

〔書入〕
肆サラス

49 謀て主人を弑する者ハ男女ニ不限肆者鑄引疵付る時ハ凡而子之親ニ對すると同様之事

50 下人他之主人を殺須者ハ磔

但(下人主人より暇を出外奉公致し居て本之主人を弑するも他之主人を殺ると同様之事)

二六一 姦ヲ因て夫を殺そ者之事

51 妻妾他人と姦通致因て夫を殺ゆる者ハ引廻之上

磔姦夫ハ獄門若男之手段而已ニ而女其謀を不知時ハ女ハ斬罪又女之手段斗ニ而男其謀を不知時ハ只姦

夫之刑ニ一等を加て罪ニ可行事

52 妻妾人と姦通致ゆるを現在姦通之所ニ而見届る時

ハ其場ニ而直ニ殺ゆる者ハ御咎メ無之事并若其場を立〔九ウ〕

去り後訴も無之擅ニ殺者ハ喧嘩ニ而人を殺と同様之事

二七一 一家三人を殺者之事

53 一家之内非死罪人三人を殺并人之支體を切解きむこ

く殺害致ゆる者ハ引廻之上磔家財闕所死者之

家江被下置事妻子ハ遠追放加擔手傳致ゆる者

共ニ獄門 但追放之事別居之子ハ御用捨之事

二八二 頭分之者謀殺致者之事

54 支配之もの頭分之者を殺んと謀既ニ行時ハ徒半年鞭三十疵付る時ハ斬罪殺時ハ磔

二九一 咒詛調伏毒藥之事

55 咒詛調伏等を以人を殺んと謀者ハ謀殺之律を以罪ニ行事若只人を苦んと謀時ハ二等を減る事毒藥用るも同様之事毒藥を買未用者ハ鞭三十其事を知り毒藥を賣者ハ同罪不知時ハ御咎無之

〔一〇オ〕

三〇一 打擲ニ而人を殺ゆる者之事

56 元より巧ニ而殺心よてハ無之一時之喧嘩打擲よて不得止事於切害ハ相手之親類名主食議之上殺さ連ゆる者平日不法者ニ相違無之ハ死罪二等を減申遍く事

減申遍く事

57 同謀て人を打擲致し因て死ニ至ゆる節ハ急所之疵を

得〔得〕させたる者を解死人ニ可致事

但〔最〕取初事を企ゆる者ハ徒一年半鞭三十余ハ鞭十五〔一〇ウ〕

三一 怪我ニ而人を殺ゆる者之事

58 怪我ニ而人を殺或ハ疵付ゆるものハ打擲之律ニ因テ贖

を取其者へ被下置事

59 途中馬車ニ而人を過ゆる者緩怠之事無之者ハ

怪我を以沙汰可致若不慎之儀於有之ハ打擲之

律を以不加事

60 危き仕業を致因テ人を殺ゆる者ハ贖ニハ難相成打

擲之律を以刑を可加事

61 喧嘩等ニ因テ傍之人を殺疵付ゆるものハ喧嘩ニ

人を疵付と可為同然事

62 若又強而人を殺んとして過テ別人を殺疵付ゆる

ものハ謀殺を以沙汰可致事

三二二 夫有罪之妻妾を殺ゆる者之事

妻妾夫之祖父母父母を打擲ニ寄其夫是を打因テ

死ニ至る時ハ御構無之若又強而擅ニ殺時ハ鞭十五

但外之罪等ニ而打殺時ハ可為解死人事

64 夫妻妾を打擲或ハ罵ホ致ニ寄其妻妾自害之時ハ

不及御沙汰事

三三二 人を逼テ死を致させたる者之事

事ニ依テ人を逼り其人自殺致ゆる時ハ鞭十五并金式両

を出さしめて死者之家へ被下置若又姦を盜を致

さん為人を逼死を致させゆる者ハ獄門

三三三 一人殺之者を内済ニ致ゆる者之事

祖父父母母人之為ニ殺さ連其子孫内済ニ致ゆる者徒一

但(重き疵ヲ負せたる節ハ夫妻妾を打擲之律ニ因テ沙汰可致事)

三三三 人を逼テ死を致させたる者之事

65 事ニ依テ人を逼り其人自殺致ゆる時ハ鞭十五并金式両

を出さしめて死者之家へ被下置若又姦を盜を致

さん為人を逼死を致させゆる者ハ獄門

三三四 一人殺之者を内済ニ致ゆる者之事

66 祖父父母母人之為ニ殺さ連其子孫内済ニ致ゆる者徒一

年半鞭三十夫殺さ連妻妾内済も同然伯叔姑

兄弟ハ二等を減可申事若子孫人之為ニ殺さ連祖父

母父母内済致ものハ鞭九平人之内済ハ鞭三

67 内済之為ニ賄を取ゆる者ハ錢高を以竊盜ニ準重キ

方を以沙汰可致事

三三五 但祖父父母殺さ連賄を取ゆる者ハ死罪

68 同居或ハ同行之人初より人を謀テ害せんとする事

乍存留メざる者并殺さ連たる後不許者ハ鞭十五

三三六 一打擲之事

69 喧嘩打擲ハ疵之輕重を以罪を定る事

不及御沙汰事

手足或ハ外之物を以打擲致する者戸メ十五日疵付

たる時ハ戸メ廿日

但打する所不破共青赤ニ腫るを疵と定む

70 血鼻口之内へ出或ハ内損血吐せざる者ハ鞭九不淨之物を以人之頭面を汚たる者も同事

71 齒一枚折手足之指一本折一目を傷并耳鼻を傷

たる者鞭十五湯火を以人を傷者不淨を以人之口

鼻江入るも同事

72 齒二枚折指二本以上を折ハ鞭十八

73 人之骨を折并兩目を傷或ハ婦人之胎を墮須并一切

之刃物之切疵ハ鞭廿四

〔書入〕「タ
墮ヤツル
クワイカッス」

〔二二ウ〕

但兵器ニ而も柄を以打時ハ刃物ニ無之事

74 手一本折足一本折一目を潰する者ハ鞭三十

75 兩手足を折兩目を潰或ハ持病ニ有之所ニ因て瘵疾

ニ至ら志むる者并人之陰険を傷者ハ徒一年半鞭三十

右科人家財半分を以疵を導する者江被下置事

右ケ条之科人大勢ニ而犯する節其内疵付する者を

重罪ニ致事本意趣企うる者ハ疵付不申共其次

之科ニ可申付事尤疵を導する者死たる時ハ同行之内

人を殺節留ざる之律ニ而定鞭十五

一喧嘩ニ而双方疵有無之事

76 喧嘩ニ而双方疵を導する節双方之疵相改疵之輕重

よて罪を定る事尤跡より手を下し理直キ方者 〔二三オ〕

二等を減可申事

三六一 疵療治之事

77 疵を蒙るる者日限を立打擲之者ハ療治致さしむべ

し若日限之内ニ死する時ハ打擲之者可為解死人事

但 日限之内ニ而も疵平愈致する者断差出する後
〔余病ニ而死する時ハ只打擲之罪を以沙汰可致事〕

78 指一本を折以上之疵日限之内療治致平愈之節ハ罪

二等を可減日限満る迄平愈無之時ハ本律を以致事

尤婦人破産并病氣平愈ニ而も痼疾ニ至らハ本律之事

79 手足其外之物ニ而輕キ打疵ハ廿日限金創火毒ハ三十日

限手足を折骨痛ニ婦人之墮胎ハ五十日限

〔書入〕「タ
墮ヤツル
クワイカッス」

三七一 勢ひを以人を縛り打擲致する者之事

〔二三ウ〕

80 爭論ニ依て人を縛り打擲致或ハ私家ニ於て人を押込

ハ致者ハ鞭九若疵重く内損吐血以上ニ至らハ平人打

擲より二等を加可申事尤自分手を下さざと母

差圖致_レる者ハ本罪ニ可致事差圖を受手を
下_レ須_レ者ハ一等を減可申事

三八 一人主人を打擲致_レる者之事

81 下人として主人を打擲致_レる者ハ獄門主人死ニ至ら者
鋸引怪我ニ而殺_レる時ハ斬罪怪我ニ而疵付_レる時ハ
徒一年半鞭三十

82 主人下人を打擲致_レる者輕き疵ハ不及御沙汰事
傷已上之疵ハ平人打擲_レる四等を減可申事死ニ至らハ

鞭十八怪我ニ而殺_レる時ハ不及御沙汰事 (一四オ)

三九 一妻妾夫を打擲致_レる者之事

83 妻夫を打擲致_レる者ハ鞭十五打傷以上之疵ハ平人_レ三
等を加可申事一目を潰_レ已上ハ斬罪死ニ至らハ磔

妾夫并妻を打擲致_レる時ハ又一等を加可申事死ニ至ハ
磔尤加_レる者ハ加_レて死ニ入る事

85 夫妻を打擲致_レる者打傷以上ニ非ざ連ハ不及御沙汰事

右以上ハ平人之律ニ二等を減可申事死ニ至らハ斬罪妾
を打擲致打傷以上ハ又二等を減可申事死ニ至らハ鞭

86 三十妻之妾を打擲致_レハ夫之妻を打擲致_レと同事怪

我ニ而殺_レる時ハ其證據於分明ハ不及御沙汰事

四〇 一兄弟之打擲之事

(一四ウ)

87 弟或ハ妹として兄姉を打擲致_レる者鞭廿七疵付_レる
時ハ鞭三十打傷時ハ徒一年半鞭三十刃傷ニ及手足を
折一目を潰以上ハ斬罪死ニ至らハ獄門伯叔父姑を打擲

致_レもの同事怪我ニ而死ニ至或ハ疵付_レる時ハ本殺傷
之罪ニ二等を可減尤贖ニハ難相成事

88 兄姉登して弟妹を打擲ニ而殺伯叔父姑之甥姪を打擲
て殺_レものハ鞭三十怪我_レて殺證據分明ニおひてハ
不及御沙汰事

89 子孫として祖父母父母を打擲致_レ者并妻として舅姑を
打擲致_レ者ハ獄門死ニ至時ハ鋸引怪我ニ而殺時ハ斬罪

90 祖父母父母子孫を打擲ニ而殺時ハ鞭十五繼母ハ一等を加
へ_レ申_レ漏_レく事 (一五オ)

但 (子孫祖父母父母を屬_レり或ハ打_レるに寄り依_レて打擲致
死ニ至ハ不及御沙汰怪我ニ而殺_レも同事

四一 一師匠を打擲致_レたる者之事

(由規)

91 師匠を打擲致_レる者ハ平人ニ二等を加可申事殺時ハ磔

料 四二二 父母人ニ被打擲其子孫打返るる者之事

92 祖父母父母人之為ニ打擲せら連たる時其子孫救ん為返打

志たる者輕き疵ハ不及御沙汰打傷以上ニ至らハ平人打

資 擲る三等を可減事死ニ至らハ定法之通可為解死人事

四三二 竊盜之事

93 盜致る者入墨之上盜取るる高ニ應し輕重罪

科可行事

定

〔一五ウ〕

十貫文以下	入墨鞭三	七十貫文以上	入墨鞭廿四
十貫文以上	同 六	八十貫文以上	同 廿七
廿貫文以上	同 九	九十貫文以上	同 三十
三十貫文以上	同 十二	百貫文以上	徒半年鞭三十
四十貫文以上	同 十五	百十貫文以上	同一年 三十
五十貫文以上	同 十八	百廿貫文以上	同一年半 三十
六十貫文以上	同 廿一	百卅貫文以上	斬罪

但徒之者ハ死罪一等を宥須事

右錢高を以罪之輕重を定る儀盜取るる品幾人ニ而分ケ
たり共分別之高ニ不抱盜取るる本高を以一人毎ニ罪を
加る事尤徒之者一等を可減事

但 一時ニ數家ニ於て盜取るる節其内只一家之財多き

高を以罪を定る事米穀ホハ時之直段を以錢ニ直し

品物ハ直打致させ錢ニ差積り可申事

94 盜ニ入たる者財物を取不申〔申事〕ハ鞭三入墨ハ許之

人之土藏を破或ハ盜ニ入るる次第ニ寄大盜ニ紛無之時ハ

但 財物ニ不抱入墨鞭三十

95 入墨之儀腕へ廻幅三步程入墨可致事尤初度ハ右腕へ彫

二度目ハ左へ彫三度ニ及時ハ不寄多少斬罪

〔四四 脱〕

96 御城中江忍入盜致るる者ハ獄門

寛政十一未年四月表坊主棟方嘉林病屈ニ而御城中江

但 紛入るる時死罪一等を許徒刑ニ被 仰付例

四五一 自分預り物を私曲致るる者之事

97 御預之物を私曲盜取るる者ハ首徒差別無之盜取たる〔徒〕

錢高を以罪を定る事尤幾人ニ而分たり共分別之高ニ〔一六ウ〕

不抱盜るる本高を以一人毎ニ罪を加る事

定

二貫五百文以下 入墨鞭九 十五貫文以上 入墨鞭廿七

二貫五百文以上	同	十二	十七貫五百文以上	同	三十
五貫文以上	同	十五	二十貫文以上	徒半年	三十
七貫五百文以上	同	十八	二十五貫文以上	同一年	三十
十貫文以上	同	廿一	三十貫文以上	同一年半	三十
十二貫五百文以上	同	廿四	四十貫文以上	同二年	三十

死罪之代ニ

四六一 御藏之財物を盜取たる者之事〔出捕〕

98 御藏之財物を盜取る者并御藏廻之者御藏之財物を私曲せる者ハ首徒〔徒〕之差別無之盜取る錢高を以〔一七オ〕罪を定る事尤幾人ニ而分たり共分別之高ニ不抱盜取たる本高を以罪を加る事尤一人毎ニ罪を加る事

定

五貫文以下	入墨鞭六	三十五貫文以上	入墨鞭二十七
五貫文以上	同	四十貫文以上	同
十貫文以上	同	四十五貫文以上	徒半年
十五貫文以上	同	五十貫文以上	同一年
二十貫文以上	同	五十五貫文以上	同一年半
二十五貫文以上	同	八十貫文以上	斬罪
三十貫文以上	同	但 <small>〔御藏廻之者私曲致ル分ハ死罪之代〕</small> 徒二年	鞭三十

四七一 強盜之事

99 追別強盜之者既ニ行時ハ財物不取共徒一年半〔一七ウ〕

既ニ財物を取時ハ同類不殘

100 盜ニ入る者其家之人と手向致或ハ疵付る節ハ強盜之可為御仕置事

但同類之者助太刀不致ハ竊盜を以可致沙汰事

101 若竊盜已ニ財物を捨去を其家人追懸因て手向致者ハ此律を不用科人手向致る律を以刑を加る事〔出〕

四八一 白昼人之物を搶奪せる者之事

102 白昼人之物を奪取者ハ鞭三十若取る品之高多キ時ハ竊盜之罪ニ二等を可加事徒之者ハ一等を可加

103 事又難船ホ之節便ニ乘〔出捕〕妨致る者同様之事喧

104 咄ホ致因て財物を奪取たる者は又同断之事

105 巾着切之類搶奪ニハ無之竊盜之律を以刑を可加事〔一八オ〕

〔四九 脱〕

106 盜之為ニ火を付る者ハ火刑但燃立不申ハ斬罪

〔一〇七 脱〕

料 五〇一 馬盜之事

108 馬を盜賣致ゆる者〔決遣〕 斬罪

資 五二一 盜杣之事

109 盜杣取致ゆる者ハ杣取之多少を以御藏之財物を盜取

ハ律を以刑を可加申事尤入墨ハ許之

110 山師共過木伐取たる者伐出之過木不殘取上伐出之

多少を以刑を可加事

111 御留山ニ而柴薪ホ盜伐者過料一貫文尤伐取高多キ

節ハ錢ニ差積り一倍之過料可申付事御留山ニ無之共

御停止木伐取ハハ同事

112 山中伐荒有之科人不相知節ハ伐荒之多少を以山下村之〔一八ウ〕

113 者ハ過料可申付事尤無極印之材木賣買致ゆる者

取上之上盜物を乍存賣買致ゆる律を以刑を可加申事

但杣一本之代リ小杉百本雜木一本之代リ小杉五十本

114 伐荒之場所江植付不相成所ハ手寄之空山見立植付可

申事尤植付多き時ハ三ヶ年五ヶ年之内植付可申事

右ハ寛政九巳年定る

五二二 流失流木盜揚之者之事

115 出水之節流失流木取上ゆる者見分之上五ヶ一山師より

相渡可申事若隱置見出さ連たる時ハ隱木之多少

を以過料可令差出事

定

拾本以下 一貫貳百文

拾本以上 一貫八百文

貳拾本以上 二貫四百文

三拾本以上 三貫文

四拾本以上 三貫六百文

五拾本以上 四貫貳百文

六拾本以上 四貫八百文

七拾本以上 五貫四百文

八拾本以上 六貫文

九拾本以上 六貫六百文

一百本以上 七貫貳百文

五三一 田野之穀物盜取者之事

116 田野之穀物盜取者ハ竊盜ニ準多少を以罪を定る事

但入墨同様之事

117 柴草木石之類人巧を以伐取積置ゆる者〔審心〕「セン」取者ハ是

又同様之事 但入墨許之「ホシヒマ、ニス」

〔一九ウ〕

五四一 夜中無故ニ人之家江入者之事

118 夜中故なきニ人之家へ入者ハ鞭三若其家人即時ニ殺

たるハ御搦無之若又既ニ捕置置ニ打擲致疵付ゆる「時

ハ平人打擲るニ等を減可申事死ニ至らハ鞭三△一書より
三十と有

五五一 盜之宿を致者之事

119 強盜之宿致ゆる者其身不行共財物分取時ハ磔

財物不取時ハ徒一年半鞭三十

120 竊盜之宿致し財物分取時ハ其身不行共竊盜之

首と可為同罪事財物不取時ハ一等を減可申事

但入墨同様之事

121 強盜竊盜之盜物乍存買ゆる者品物錢ニ差積り 〔二〇オ〕

竊盜之律ニ二等を減し罪を可行事乍存預置者

又一等を可減事

但 (品物高多き共鞭十五ニ而許可申事若不存時ハ
御携無之品物ハ本人江可返事)

〔五六 脱〕

122 手段を設ケ人を匂引者ハ鞭三十因而人を疵付ゆる者ハ

斬罪

五七一 入墨抜取者之事

123 盜を致入墨ニ被行たる者其後竊ニ抜者ハ鞭三入墨仕

直可申付事

五八一 謀書謀判致者之事

124 御印并奉行諸役人之判を似せ造諸渡ハ盜取者ハ獄門

未タ財物不取時ハ死罪一等を可減事

125 似せ手形似せ手紙或ハ古手形を取捨公私之財物を

取者ハ竊盜ニ準錢高を以罪科之輕重可行事 〔二〇ウ〕

但入墨竊盜同様之事

126 語らひ手段ニ而取者ハ又竊盜同様之事

但入墨許之

127 物取為ニ無之申和解之為ニ有合之印形押類ハ竊盜ニ

準一等を減可申事 但入墨許之

五九一 役人を似せたる者之事

128 在々通り役人ニ似せ往來之人馬賄ハ為差出たる者ハ

鞭三十

六〇一 似せ金銀を造る者之事

129 似せ金銀造者并私ニ錢を鑄る者ハ磔細工人同罪其

余加談者ハ死罪一等を減可申事 〔二一オ〕

但似せ金銀と乍存通用致者同様之事

料

六一一 枉法賄賂之事△〔マ、ハ、ル〕枉法賄賂之賊と云ハ金銀財貨を

130 賄賂を取仕ふる事を致者ハ錢之高を以輕重之罪ニ

可行事尤何人受ても惣錢押合其高を以罪を相

資

立可申事若犯たる事重くハ人之罪を輕重致

たる律を以刑を加可申事

定

五貫文以下 鞭 六

五貫文以上 同 九

十貫文以上 同 十二

十五貫文以上 同 十五

二十貫文以上 同 十八

二十五貫文以上 同 廿一

三十貫文以上 同 廿四

三十五貫文以上 鞭 廿七

四十貫文以上 同 三十

四十五貫文以上 同 三十

五十貫文以上 同 三十

五十五貫文以上 同 三十

百二十貫文以上 同 三十

〔二一ウ〕

六一二 不枉法賄賂之事

131 賴を受けて錢を取たり共仕ふる事無之者ハ惣錢之高

押合半分ニして罪を定る

但一人より受るハ半分ニ不可致事

定

十貫文以下 鞭 三

七十貫文以上 鞭 二十四

十貫文以上 同 六

二十貫文以上 同 九

三十貫文以上 同 十二

四十貫文以上 同 十五

五十貫文以上 同 十八

六十貫文以上 同 廿一

八十貫文以上 同 二十七

九十貫文以上 同 三十

一百貫文以上 同 三十

百十貫文以上 同 三十

百廿貫文以上 同 三十

〔二一ウ〕

六三二 坐贓之事△〔賣入〕サウ贓作郎友玉篇ニ云受賄也凡非理所得財物皆曰贓

132 差而賴合之事も無之通例□財を受ハ坐贓之罪ニ可行

事尤惣錢高半分ニ致して罪を定る事前条同断

但與へたる者ハ三等を可減事

十貫文以下 戸ノ廿日

十貫文以上 同 三十日

二十貫文以上 鞭 三

三十貫文以上 同 六

四十貫文以上 同 九

五十貫文以上 同 十二

六十貫文以上 鞭 十五

七十貫文以上 同 十八

八十貫文以上 同 廿一

九十貫文以上 同 廿四

一百貫文以上 同 廿七

百廿貫文以上 同 三十

〔二一ウ〕

六四一 賄賂之約諾致たる者之事

133 賄賂之約諾致し未_レ財物を手ニ入連不申共事を枉

たる者ハ枉法ニ準一等を減罪を加可申事約諾而已_レて未_レ事枉不申時ハ不枉法ニ準一等を減罪を加可申事

六五一 賄賂を行たる者之事

134 下之者願事有之賄賂を行て法を枉る事を得る時ハ

差出_ルる銭高を以贖の律ニ當て刑を可加事尤枉たる事重_クハ重き方ニ而沙汰可致事若上_ルる人強而無抛差出_ルる時ハ御咎無之事

六六一 茂合取立私曲致_ルる者之事

135 茂合銭為差出私用ニ致_ルる者ハ枉法之律を以罪ニ

可行事音信ニ相用自分用ニ立不申共同様之事 (二三オ)

六七 隠田畑之事

136 隠田畑致ものハ一反歩_ヲ五反歩迄ハ鞭六五反歩毎ニ

一等を加可申事

但 (隠田畑御取上之上隠_ルる反_刈一年之年貢可為差出事)

137 御検見之節惡地抔振替見せ_ルる者ハ右之格ニ而一等_ヲ

減可申事尤反刈多く共鞭十五ニ而許可申事村役之

者存見通し置時ハ本人同罪之事若不存時ハ

五反歩以下ハ許之五反歩以上ハ右之格ニ而三等を

減可申事尤反刈多く共鞭九ニ而許可申事

六八一 田畑質入之事

138 年季を以質ニ入_ルる田畑年季相濟本人_ノ元利返 (二三ウ)

濟受戻を求_ルハ外事ニ託し不相返年來押領致者

鞭三年來之小作米可令返事

六九 一田畑押領之事

139 他人之田畑を事ニ寄せ押領致者屢敷ハ一軒田畑者

一反歩_ヲ五反歩迄鞭三五反歩毎ニ一等を加可申事

尤反刈多く共鞭十八ニ而用捨可致事

但年來之小作米可令返事前条同然之事

七〇 一御取納遲滞之事

140 御取納ハ年々十一月晦日迄ニ皆済可致事若翌正月

迄無故して皆済無之者ハ御取納之高十分ニ割一分

滞時ハ戸メ廿日一分毎ニ三等を加可申事村役同様尤

鞭九迄ニ而可許事

〔二四オ〕

七二 内借之事

資

141 御藏廻之者御藏之米錢内借致者ハ米錢之高を以

竊盜ニ準罪ニ可行事若懸之者ニ阿らざ連ハ一等を減

142 可申事器財之類自分之物と取替ひ者同様之事

但入墨ハ許之

七二 訴訟附手越之訴状之事

143 訴状差出者其向々支配頭江差出可申事手越ニ致

奉行御役人ニ差出たり共取上申間敷事若願難

相成事を強而手越ニ出ゆる時ハ戸メ三十日

但願相立逼き筋を支配頭ニ而取押置或ハ支配頭

非道之取扱有之訴願者可為格別事

七三 無名之訴状之事

〔二四ウ〕

144 無名之訴状投文致者ハ鞭三訴状之趣取上沙汰致間敷事

七四 不実之事を致訴状者之事

145 不実之事を申出人を罪ニ落んと^{〔ナ〕}する者鞭刑追放ニ可

行事を訴る時ハ可為鞭刑追放若死罪ニ可相成儀を
訴る時ハ徒一年半鞭三十

146 若訴ら連ゆる者御沙汰既ニ極其罪ニ行連後不実之旨

頭ハ連たる時ハ罪ニ行ひたる者之刑三等を加可申事死

罪ニ行ハ連ゆる時ハ可為解死人事

147 若二ヶ条訴ハ節軽き事ハ実ニ而重方偽或ハ一事ニ而も

軽き事重く申出る者鞭之内実事差引残る鞭

数を以刑ニ可行事

〔二五オ〕

七五 親族訴者之事

148 子孫として祖父母父母之事を訴へ妻与して夫并舅姑ヲ

訴る者鞭三十虚説を摺裁許を願者斬罪

149 伯叔姑^{〔又〕}兄弟姉之事を訴る者ハ鞭十五訴る事偽ならハ

平人ノ三等を加可申事

但(訴ら連たる者科人自身申出律と同様之事若伯叔父
兄弟非道之事有之不得止事申出ゆる時ハ可為格別事

七六 子孫父母之教ニ背く者之事

150 子孫として父母之教ニ背或ハ養育欠ゆる儀有之者

ハ鞭十五 但父母申出ニ寄刑を可加事

七七一 訴訟之腰推致者之事

〔二五ウ〕

151 訴訟之腰推致し或ハ人之為ニ訴訟を造り人を罪ニ落ん〔と登〕せる者本人と同罪之事

七八一 強訴之事

152 願難相成儀を大勢徒黨を致支配頭之差圖を不相用

強訴ニ於てハ其棟梁致たる者鞭廿四加擔之者一等を減可申事其餘一通之余黨ハ吟味之上用捨可有事

七九一 隠津出之事

153 隠津出致ゆる者品物取押鞭十五相對致贓りたる科

料一貫貳百文

但二百俵以上之隠津出ハ家財家屋敷廂所所拂可致事

154 米留有之節無手形ニ而米隠出〔た〕ゆる者鞭六駄〔タ〕賃附者

科料一貫二百文

〔二六オ〕

八〇一 隠荷揚之事

155 旅船荷揚致者品物取押相對之間屋鞭六家業取

放之事

八一 一 隠商賣之事

156 隠商賣致者品物取押科料可為差出事

但 科料之定別帳戸数方条例有之

八二 一 博奕之事

157 博奕致たる者鞭三其場之金錢没官可致事

但 宿致ゆる者可為同罪事〔其場ニ居合せゆる者之外同類有之共一々食議ニ不及事〕

輕き宝引等之類致ゆる者ハ戸メ三十日

〔二六ウ〕

八三 一 御用を頼合致者之事

158 御用事を曲て頼合致者戸メ三十日頼者并頼を受ける者

同罪之事若既ニ施行之時ハ頼を受ける者鞭六頼ゆる者

ハ其事親戚朋友之為之時ハ本罪ニ二等を減自身之為

ニ致ル時ハ本罪之上ニ又一等を加尤曲る事重くハ人之

罪を輕重致律を以刑を加可申事はが為ニ賄賂を取時

ハ枉法之律を以刑を加可申事

八四 一 人之罪を輕重致者之事

159 依怙鼻負を以人之罪を輕重致者ハ其増減致ゆる所を

以其分之罪を可加事若或ハ全く隠し或ハ全く偽時ハ其

本罪を以刑を可加事

〔二七オ〕

八五一失火之事

資

160 失火致ゆ者戸メ廿日類焼有之時ハ三十日因て人を焼死

之時ハ鞭十五一家之内誰ニ而茂手過を致者ハ刑を加る

事若御宗廟并御城郭類焼ニ於てハ徒一年半鞭三十

161 諸役所并御藏内ニ於て致失火者鞭廿四

八七一御觸ニ背者之事

163 御觸ニ背者ハ事之輕きハ戸メ十五重きハ三十日

八六一野火付ゆ者之事

162 山野江野火付ゆ者鞭三若本人不相知時ハ其領分之村

所江過料可為差出事

但 過料之定郡方別帳ニ条例有之事

〔二七ウ〕

八八一不可為儀を致者之事

164 不可為儀を致者ハ事之輕きハ廿日重きハ鞭三此ケ条之

儀元來重き科ハ律ニ正しくケ条雖有之輕き事ニ

至り事変万端ケ条ニ難述間有様之儀二等ニ分此ケ

条を以沙汰可致事

八九一科人手向致者之事

165 科人^逃逃去捕手之者へ手向致者本罪之上ニ二等を加可

申事尤人ニ疵付打傷ニ至らハ斬罪

九〇一科人出奔之事

166 牢破并預ケ之内繩解き出奔致ゆる者ハ本罪ニ二等

を加可申事

〔二八オ〕

167 預ケ之者不覚ニ而取逃ゆ者預人并番人三十日之内捕ゆ

様申付若捕兼るに於てハ科人之科ハ三等を可減事

覚ツ、態ニ逃したる者ハ科人と可為同罪事

九一一科人を隠者之事

168 科有之御食議之者を存存隠置或ハ其事を告知らせ

逃したる節ハ科人之罪ニ一等を可減事

九二一私ニ^弁私^弁を造者之事

169 私^七私^七秤を造り通用秤秤を増減致し奸曲之者鞭六

九三 御関所忍通者之事

〔二八ウ〕

170 御関所忍通る者ハ鞭九山越致者ハ鞭十二

九四 一立帰之者之事

171 科有之御沙汰之上追放被仰付たる者御搦之地江立

帰る時ハ鞭三本之如く追放可致事

172 悪事有之他国へ出奔致其後立帰り忍居る者本

罪より一等を加可申事

但 本罪軽々ハ御関所忍通罪ニ一等を加可申事

173 悪事無之出奔之後立帰之者御関所之外ニ出不申時ハ

科代夫役廿日

九五 馬札紛失之事

〔174 脱〕

175 馬札紛失致^{〔七〕}る者ハ科料一貫文

〔二九オ〕

九六 姦淫之事

176 姦淫之者ハ男女共ニ鞭九夫有之女ハ鞭三十

177 強淫之者ハ徒一年半鞭三十未成者ハ鞭三十

178 幼女十二歳以下姦淫したる者ハ強淫同様之事

179 妻女を許て姦淫致させたる者ハ本夫姦夫姦婦

何連も同罪之事

右何連も姦所ニおゐて見届ケ審ら成證據有之夫或ハ

親類^{〔八〕}申出ニ寄御沙汰可致事外^{〔九〕}訴る類ハ御取上無之

九七 僧尼之犯姦之事

180 僧尼犯姦之者ハ平人姦淫之罪ニ一等を加へ還俗可為

致事相姦之者ハ平人之姦淫之罪ニ可行事 〔二九ウ〕

九八 一人家長之妻女を姦^{〔十〕}者之事

181 下人として家長之妻女を姦^{〔十一〕}者ハ斬罪妻ハ一等

を減可申事

九九 相對死之事

182 男女申合相果る子細無之ハ死體取捨若女を先ニ殺し

〔十二〕 男存命ならハ解死人男相果女存命ならハ解死人ニ不

〔十三〕 肆 及三日肆し後乞食之手へ可渡事

183 男女疵斗ニ而存命之時ハ是又三日肆し乞食手へ可渡事

184 主人下人と申合相果る者下人相果主人存命之時者

解死人ニ不及乞食手へ可相渡主人相果下人存命之

料

時八獄門

〔三〇才〕

一〇〇一隠游女之事

資

185 御免之場所之外隠遊女抱置渡世致者ハ鞭三

以上

伴 才 助

参考

吉沢 庄太夫

寛政九丁巳年三月

菊池 寛司

閱正

赤石安右衛門

御自筆之写

刑法幟沙汰之通申付ハ一体刑法之儀兼而一定

之上ニハ得共猶其時宜ニ寄輕重之沙汰も可有之〔三〇ウ〕

事ニハ且ケ条適當之罪人有之ハ共何連君臣之

義を立父子之親ニ本付総而人輪倫之義を論シ

其時々沙汰致ハ様依而必シ茂其ケ条ニ不可

泥事ニハ

己三月

覚

科人片付之儀區々之沙汰有之ハニ付此度

御刑法沙汰被 仰付申出之趣被遊

御聴届猶又以

御自筆被 仰出ハ間致勘弁批判遂穿鑿

〔三一才〕

勸善懲惡ニ相成ハ様沙汰可有之旨四奉行江

能々可被申合ハ以上

三月

御家老

御用人中

古川藏書

〔朱印〕

福本藏書

〔三一ウ〕

本書について弘前市立弘前図書館の『郷土資料目録 第二巻

岩見文庫郷土資料目録その一』(昭和三十六年三月)には、

刑法 GK三二二・五 二三

寛政九年(一八二六)

伴 才助(建尹)

吉沢庄大夫 参考

菊池 寛司(正礼)

赤石安右衛門(行建) 閱正

写 一冊 半紙 和

寛政律といわれるもの (二七頁)

と記す(原文、横書洋数字)。

本書の体裁は、縦二四・一センチ、横一七・一センチで、表紙は、薄茶色の横刷毛目をほどこした厚紙を、袋綴の本文三丁の前後に、緑糸で四目綴したものである。一丁二行、片面一行、一行に二一、二字前後で、今回示した通りである。朱筆は一部にのみ見られるほか、書き入れもある。表紙のラベルには、配架番号(GK三二二・五 二三)を示すもの他に、「岩見文庫／六法度定書／四八」なるものも貼られている。表紙見返しと本文第一丁表には館蔵印「岩見文庫／G六八一／弘前図書館」が捺されている。以上は弘前図書館によるものであ

る。

本書が岩見文庫に収められる以前の伝来経路を示すものとしては、まず本文の冒頭、第一丁表の右下隅と、本文の末尾、第三一丁裏の左下隅に捺された朱長方印「福本蔵書」がある。つぎに、本文末尾の同印のすぐ前には、本文とは異筆の墨書で、「古川蔵書」と記す。両者の関係は、その位置関係から見て、もと古川某の手元にあった本書が、のちに福本某の手に移り、さらに故岩見常三郎氏の所蔵するところとなったものとみられる。古川、福本両氏については未詳である。

本文の文字は手慣れた御家流で、個人の手控えといった感を受ける。朱筆は二カ所で、いずれも文字の訂正である(一ウの管を管に、二オの二を一に、一一オの不を可に改めたものである。書き入れは一〇カ所で、三オの贖、七ウの没、九ウの肆、一ウの擅、一二ウの墮、一三ウの墮、三〇オの肆などが、難字を書出して、カタカナで音訓を付したり、意味を付している。さらに本文中にもカタカナで音を付しているものも見られる。八ウのサラス、一九ウのセン・ホシヒマ、ニス、二六オのタ、などである。二〇オの118条末尾「鞭三」の後に「△一書に三十と有」と記すが、この一書に当たる「鞭三十」と記すのは(二)、(三)、(四)、(七)、(八)、(十)などであり、(三)には末尾に

料 「△有書ニ三ト有」とも記す。「鞭三」とするのは他に(五)、

(六)などである。

資 本書は各項目を一つ書きで始め、逆に各条文冒頭の一つ書きを省略している点に他本とことなる特徴を有する。すでに紹介した中では(八)の寛政律第六本のみが条文冒頭の一つ書きを省き、そのために条文間の混同が見られる。本書では27条・28

条、102・103・104条、112・113条、141・142条などに混同が見られる。項目名の脱落は四四、四九と五六、条文の欠落は47、107、174

条である。(五)は、項目名のうち四四は存するが、四九と五六は原本にはこれを欠いたようで、朱筆で補っている。また条文についても47条は存するが、107・174条は欠いている。(六)も、項目名のうち四四は存するが、四九・五六は欠いている。条文も47・107条は欠いている(132条以下は欠いているので、174条については不明)。両本が本書に近いことが知られる。

なお三〇ウにみえる伴 才助・吉沢庄大夫・菊池寛司・赤石安右衛門については、(三)の本文末にも同文が記されている。

賄賂の部では、六〇・六一・六二の表題につづけて他の箇所に見られぬ注釈が施されているが、本によってこれを全く有しないもの(既紹介のうち四・七・八・十)と、一部のみを記すもの(二・三・六・十一)がある。京大本を手掛りに本来の内

容をあらためて紹介すると、六一枉法賄賂之事では「枉法ノ贓ト云ハ、金銀貨財ヲ取テ、其罪ヲ見ノガシニシテヤル、此法ヲ枉贓也」、六二不枉法賄賂之事では「不枉贓トハ、法ハ枉ネトモ、賄賂ヲ受ルヲ云、凡不義ノ財ヲ贓ト云ナリ」、六三坐贓之事では「贓 慈郎切、音贓、吏受之賄也、凡非理所得財賄、皆曰贓」となる。いずれも揃っているのは京大本の他は五と九のみであるが、五は六三の欄外にさらに「贓 唐土名勝図会云、受贓トハ官ニ有テ非理ノ賄賂ヲ取ルヲイフ」なる朱書入が見られる。三では六一はほぼ同じだが、六二は欠き、六三は異なる。「贓作郎反、玉篇ニ云、受賄也、凡非理所得財賄、物皆贓、亦作贓、前漢書尹賞伝曰、其羞辱甚於貪汙坐贓ト云々」なる引用がみられる。本書十一に最も似る。現行の大広益会玉篇卷二十五の貝部四百八には、「贓 作郎切、贓也」とのみで、引用されているのは原本玉篇系統と推定でき、いずれも明律注釈書に基づくものであろうか。なお尹賞伝は漢書卷九十酷吏伝に見える。

本稿は、一九八九年(平成元年)度大阪経済法科大学研究奨励金による研究成果の一部である。

訂正 (十)第二十号一七六頁上段 左から四行目

第十一号上段 ↓ 第十一号一五四頁上段

付7 『要記秘鑑』三十四(一)

凡例

- 一 弘前市立弘前図書館所蔵本(K二〇九―二)を用いた。
- 一 字体、字配りはできる限り、原本に従った。異体字・変体仮名については、必ずしも原本に従ってはいない。
- 一 前号までの三十三と合せて「凶事之部」を構成するので、三十三に付した仮項目番号一、二、三、…、および各件番号1、2、3、…、に続けて、番号を付す。
- 一 原本の行末が次行に及んだ場合は、行末を示すため、「」を加えた。
- 一 原本の丁数・表裏を各終行末に「」で示した。
- 一 他に適宜書き加えた箇所も「」で示した。
- 一 朱抹の文字は左に「」を付した。
- 一 適宜、読点を施した。

〔表紙〕

<p>凶事之部</p> <p>要記秘鑑 三十四</p>

(縦23.1cm×横16.0cm)

目録

- 〔一〕 一 御印物 印判
- 四 一 御出之節間違
- 七 一 御家老御用人江無禮
- 八 一 御献上 日之丸 御進物間違
- 九 一 諸御禮 披露違 著服違
- 十一 一 御名代 御召物間違
- 十二 一 御臺所廻
- 十四 一 諸断 通用 御請間違
- 十八 一 刀鞘走 慮外

〔目録一才〕

料 十一 一 認違 遲滯 不吟味 不心附 心得違 御書物

廿二 一 誓詞 御飛脚 登

廿四 一 御藏 御鍵 湊 順違 目論違

資 廿八 一 田方 山方 屋敷 夜廻 養子

廿九 一 諸渡物 押物 御用違

三十 一 組支配

卅一 一 變 鐘 失物 咎人 盜賊 御預 遠慮

關所 評定所

卅五 一 遠慮 慎 御呵

五十三 一 遠慮日數御定

六十 一 町在之者御追等之節御家中遠慮

〔二オ〕

〔二一〕 御印物 印判

357 享保五年四月八日 五月十三日御免被仰付之、

一 碇ヶ関町奉行花田与次右衛門、御傳馬御印江子共落書

仕、遠慮伺之通、

358 宝曆三年九月二日 十月二日御免、

一 修ヶ沢町奉行花田与次右衛門、継飛脚御證文江直二日
書致シ出御切手紙江雨漏、遠慮伺之通、過料銀壹枚

上納被仰付之、

359 宝曆十年九月廿六日 同卅日御免、

〔朱繼世〕

一 御手廻後藤矢柄、親兵司請取御傳馬御印、死後不
相見得、過料銀壹枚上納被仰付、遠慮御用捨ヲ以不及、

360 同年九月卅日

一 御印紙取扱役佐々木彦左衛門、黒石用馬登セ 御印紙

御差圖無御座内差出シ、遠慮伺之通、

十一月二日遠慮御免、御目見以下御留守居支配被仰付

也、

同四日遠慮伺之通、同廿四日御免、

宝曆十年九月卅日 十月十日御免、

一 御留守居組頭小山内宗左衛門、右ニ付遠慮伺之通、

361 明和六年七月廿日 七月廿八日御免、

一 掃除小人大川村八助、御坊主方御茶請取御印手形

紛失、慎申付之、過料銀壹枚上納、

362 明和三年二月六日 三月六日御免、

一諸手物頭傍嶋九郎左衛門、去月中青森在番之処、大地震
ニ而「御仮屋潰レ砌、出火ニ而御道具并御傳馬 御印焼
失、」遠慮伺之通、

363 明和九年十一月廿九日

一青森町奉行申出レ、支配 御印紙取扱役 御印紙老枚
紛失ニ付、遠慮伺不及、

一右取扱役兩人五日代ニ而相慎レ様、免許申付レ節、相違
様申遣之、過料銀老枚上納、

364 安永三年九月廿日 同廿八日戸メ差許、

一高杉村半六、御印手形入書状取落、過料銀老枚上
納、戸メ申付之、 (一ウ)

365 安永八年十一月廿七日 同廿九日御免、

一代官 對馬七郎兵衛、御役銀上納 御印手形紛失、遠
慮伺之通、過料銀老枚上納、

366 天明元年八月廿三日 九月廿三日御免、

一碓ヶ関町奉行猪俣市郎左衛門、離飛脚御證文家來取

落、遠慮伺之通、過料銀老枚上納、

367 天明三年二月六日

一御留守居組桜田元次郎、知行米請取印鑑紛失ニ付、過
料銀老枚上納之上、重印鑑伺之通、

368 同年二月廿六日

一深浦町同心警固木村七右衛門、勤番賄手形一卷紛失ニ
付、過料「銀老枚上納、戸メ申付之、

369 明和三年十一月九日

一御馬廻黒瀧安之助、石渡御藏奉行之処、御藏於長屋
印判紛失、遠慮伺申出之、不及遠慮、

370 天明三年十一月五日

一御留守居組頭江三御關所出人、女之儀へ老人ニ而も「二才」
御印紙之御定法之処、大夫兵八拘役者御關所出之節、男
女入交切手紙ニ而差出レ儀、御察議之処、

御印紙取扱役三上喜右衛門不心付ニ付、遠慮伺之通、
十二月四日 御免、同役神吾内、右ニ付同日遠慮伺之

通、同廿六日」御免、

一御留守居組頭白取数馬、右ニ付遠慮伺之通、

同十一月九日、同十三日 御免、同役藤田庄助、右ニ

付同十六日遠」慮伺之通、同廿日 御免、

371

〔七八五〕
天明五年四月廿六日

一青森大町甚助、去七月出御切手紙請取、罷帰不申、同人
妻子死」絶、親類も無之ニ付、甚助帰国次第御切手紙上
納被仰付度旨、」同所町奉行申出之通、

372

同年十二月四日

一東長町北御藏奉行神七郎右衛門・米橋新三郎、御印手
形紛」失ニ付、勘定奉行ニ過料上納之儀申出被得共、無
調法之儀」有之、當月九日御役下ニ付、過料^等之儀御沙
汰無之、」

373

〔二七九〕
寛政三年四月十九日 同廿一日御免、

一御手廻小山内弥内、御切手紙紛失ニ付、遠慮伺之通、過
料銀」考枚上納、

〔二〇〕

374 寛政三年八月十九日 九月八日御免、

一大組足輕千葉仁右衛門、當大坂御廻船上乗被仰付、船中
粮」米 御印手形取落、粮米受取不申、自分ニ而取繕、
右御用」相濟下着ニ付 御免願申出之、 御定之通銀卷
枚上納之上、急」度慎申付之、

375

〔二七九〕
寛政四年十月十七日 同十九日御免、

一伊東次部左衛門儀、炭御藏受拂役相動罷有以処、印形之
手形」紙被盜取、不^レニ付炭六十俵代錢上納之上、受拂
役引取」被 仰付^レニ付、遠慮伺之通、

376

〔二七九〕
寛政六年二月二日

一吉岡喜太郎・吉田清藏・大沢甚右衛門、駒越御買上流木
御」家中江御貸渡被仰付、去九月九日相渡^レ分手形廿七
枚之」表錢高八百三十目、右卷文庫江入置^レ処、單喰
破、相」見得不申^レニ付、御聞届被仰付度旨、勘定奉行
迄委細」申出、此度ハ調帳を以、勘定相通^レ様、右手形
吉田清藏宅江」持參之処、右林之儀不埒ニ付、以來為
御^レ、清藏儀懐申」付旨、諸手物頭江申遣之、

但清藏儀、勤方不宜、先頃諸手足輕江役下ニ付、物頭

江」申付之、

〔三才〕

377 寛政六年閏十一月廿日

一太田兵左衛門儀、去ル丑年金木御藏奉行被仰付、罷下
ニ付、御持」扶手形 御印相濟持參之処、何方江入込
哉、相見得不申ニ付、「御奉公遠慮伺之通、尤御定法之
通、過料銀老枚上納被」 仰付、同廿二日御免、

〔約十行分、空白〕

〔二二〕 御出之節間違

〔三ウ〕

378 宝曆十三年正月十三日

一御目付申立、去ル十三日御能初之節 御前置遅ク差出
儀、御不審ニ付、遠慮伺申出之、御祝儀之内ニ付御用
捨、向」後間違無之様被仰付旨申遣之、

379 明和五年十月廿六日 同廿八日御免、

一寺社奉行成田文左衛門、御目付野呂理右衛門、昨廿五日
御先詰之処、「道不宜 御廟參相成申間敷旨、報恩寺申
込所、不吟味ニ付、「遠慮伺之通、

380 安永二年閏三月十六日 同十八日御免、

一寄合大湯勝三郎、御社參之節、門」不申、遠慮伺之通、

381 安永三年七月廿二日

一諏訪門兵衛、昨廿一日高岡 御社參之節、御本社 御
先間違」遠慮伺申出、御用捨ニ而不及遠慮、

382 安永三年九月七日 同十四日御免、

一御召馬役嶋村惣左衛門、昨日御馬事御定日ニ御座、所、
前日」被仰付茂無御座、同役申合、遠方江罷出、御
馬事被罷出不」申、遠慮伺之通、

同日

一成田藤吉申立、昨日御馬事之節、同役惣左衛門儀、私
江申合、他出仕、早速不申上、遠慮伺申出、御用
捨被仰付之、

〔四才〕

383 安永四年正月十八日

一御留守居組兼平長藏、今十四日 御社參之節、門閉不申、
遠」慮伺申出之、御用捨被 仰付之、

料 384 安永四年二月廿九日 三月四日御免、

一御徒小頭藤田彦藏、去ル廿六日 御出之節於下乘下賤之者伏り」罷在ひを見當不申、御目障ニ相成、御目付の御尋ニ付、遠慮伺」之通、

資

一御徒代目付三上源八、右同断ニ付遠慮伺之通、

一御徒七人、右同断ニ付遠慮伺之通、

一右ニ付 御先拂之足輕兩人押込置ひ旨、頭方る申出之、四月十一日御」給分被召放、弘前追放、

385 〔七七九〕 安永八年正月十日

一御目付傍嶋源八郎・須藤忠兵衛、御供揃被仰付ひ節、

梅之間」御次御留守居組頭詰合無御座ひ内宜旨申上、遠慮伺申出、」御用捨被仰付之、

一御留守居組頭山中六左衛門、今日 御社参ニ付御留守詰遅刻仕遠」慮伺申出之、御出之御間ニも合ひニ付、御用捨被仰付之、」

386 〔七八〇〕 安永九年十月五日

一御目付石黒角兵衛、御出御道筋別段被仰出ひ所、間違通用落」仕、遠慮伺申出、此度者御用捨被仰付之、

〔四ウ〕

387 〔七八六〕 安永十年二月廿八日 三月四日御免、

一御手廻番頭齋藤甚之助、去ル廿五日 御佛参之節、御番所前」御通之節平伏遅成、遠慮伺之通、

一御手廻三人、右同断ニ付、遠慮伺之通、

388 〔七八四〕 天明四年十一月廿四日

一御手廻成田惣次郎儀、去ル廿五日 御通之節、是迄御觸御座ひ所、」此度御觸無御座、一向不奉存、門打不申、遠慮伺申出之、不及遠」慮旨申遣之、

389 〔七八五〕 天明五年二月七日 同十四日御免、

一杉山源吾、當月高岡 御宮番ニ而罷在ひ所、去ル三日門前 御通之」節、長屋格子之内人形相見得ひ旨、御不審ニ付、遠慮伺之通、」

390 〔七八六〕 天明六年十二月二日

一御目付野上甚五右衛門、今日 御供揃宜段不申上、遠慮伺申出、御用捨」被仰付之、

391 〔七八七〕 天明七年四月八日

御馬廻与力鎌田嘉左衛門・三浦伊三郎、去ル二日 御出

之節、外南」當番之処、平伏不致罷有旨、御不審ニ付、
矣讓仕之処、心得違之」旨申出ルニ付、遠慮申付置ル旨

申出之、承届ル、」
同十五日右遠慮差許之儀、伺之通、

392 天明八年六月四日

〔二七八八〕
一御目付石郷岡善左衛門、昨日御馬事御供揃之節、間違之
〔五才〕
儀有」之、遠慮伺申出之、御用捨

一御小性組桜田元次郎・成田彦八、昨日御馬場江御出ニ
付、御供之処、」支度之内間違、御間ニ相兼、遠慮伺申
出之、御用捨被仰付之、」

393 天明六年十月十九日 同廿四日御免、

一大納戸役兼前田源次郎、高岡 御社參之節刻遅遅成罷
出ルニ付、遠慮伺之通、

394 〔二七九〇〕
寛政二年八月廿八日 九月三日御免、

一御小性組頭吉崎勇八、野稽古 高覽之節、御小性組 御
供」之儀ニ付心得違、遠慮伺之通、

395 〔二七九二〕
寛政三年十月廿四日

一御目付以下御留守居支配成田勇助、體孝院様御位牌
御」通之節、門ノ不申、遠慮伺申出、御用捨被仰付之、

396 〔二七九七〕
寛政四年九月十一日

一津輕本次郎、昨日御乘廻ニ付、門前 御通之節、差懸門
閉ル」而 御目障ニも相成可申、恐入ルニ付、遠慮伺申
出之、不及旨被」仰付之、

397 同十八日

一西館文之助、昨夜 御帰城之節、小門閉不申ルニ付、遠
慮伺申出之、」御用捨被 仰付之、 〔五ウ〕

398 〔二七九八〕
寛政十年十月廿二日 同十五日御免、

一御中小性成田忠八・對馬八弥、廿一日外御馬場江御供之
節、御心得違」マて廻し下駄相用ルニ付、遠慮伺之通、

399 〔二七九九〕
寛政十一年四月十九日

一御目付申出ル、昨十八日高岡百沢江御社參被遊ルニ付、
去ル十三日」御徒小頭ノ御道筋伺書差出、伺之通被仰付

ゆ処、一昨日「沢」与左衛門御奉公遠慮被仰付ゆ、依之私共右御道筋伺直」之儀御徒小頭江可申付ゆ所、御用繁ニ取紛、伺直不仕、「御社參相濟ゆ旨、御目付七人ノ御奉公遠慮伺申出、何レも」御用捨ヲ以、不及遠慮旨被仰付之、

400

〔六一三〕
文化十年十二月十四日 屋形様所々御出之節、御家中

遠慮」差合慎^{〔等〕}ホ之族之門前 御通之儀ニ付、公邊御振合御」閉合之處、御附札ニ而左之通、

公方様御成之節、遠慮差合慎ホ之族之門前も被

遊 御通行ゆ哉、

右之通乍御世話御点羽ニ而被 仰知度奉願ゆ以上、

御附札

御書面之趣ハ、無御構、通御ニて相成申ゆ、遠慮差合

慎ホ之面々」よりハ積手桶又ハ臺挑灯差出方ホ之儀ハ、

兼而向寄御」目付へ可相伺儀ト存ゆ、

右之通へ付、以來無御構 御通之儀被 仰出ゆニ付、左

之通、」 〔六才〕

一御家中之面々慎并遠慮ホ被仰付罷有ゆ節、御出ホ有之、

屋敷前掃除之儀、以來屋敷方手ニ而掃除致ゆ様、被

仰付ゆ間、其度々御目付申合、可被申付旨、作事奉行江申遣之、」

401

〔二七九〕
寛政十一年五月六日 同八日御免、

一御近習醫者上原元永・御中小性大沼富之丞・一戸統一

儀、去月廿九日」黒石江御供之節、出刻限遅成、恐入ゆ

ニ付、遠慮伺之通、」

402

同年八月十二日 同十六日御免、

一中村忠次郎儀、昨日於茂森町 御姫様御通之節、御出之

後」不案内ニ而女中通り之中罷通ゆニ付、遠慮伺之通、

403

〔一八〇〕
享和元年五月九日 同十八日御免、

一御手廻与力鹿内源藏・桑田嘉兵衛儀、一昨日 御姫様御

出之節、「内東大御門開キ不申、心得違ニ付、御奉公遠

慮被仰付之、」

同十三日

一右ニ付、御供御小性組頭、御廣敷御用邊、御小性組御中

小性、御一廣敷御番人、御徒目付、足輕目付、遠慮伺申

出之、御用捨ヲ以」不及旨被仰付之、 〔六ウ〕

〔二三〕 御家老御用人江無禮

404 安永七年正月廿三日 同廿六日御免、

一御馬廻与力米橋善司・三上吉左衛門、去ル十五日外南當番之処、下座不心得之儀有之、遠慮伺申出之間、一昨廿一日を遠慮伺之通申付置の旨申出之、

405 安永九年七月廿六日 八月六日御免、

一御手廻与力佐野伴次郎、去ル廿一日朝喜多村監物殿登城之節、「明六ッ散之内ニ付御門開キ不申、御遲滞ニ相成ルニ付、遠慮伺之通、」

406 天明六年二月廿四日 三月十三日御免、

一御目見以上御留守居支配奈良源十郎、於途中、吉村場左衛門江「無礼之儀有之、遠慮申付之、
一御廣敷御用達芥川茂左衛門伴甚次郎、右同断ニ付慎被仰付旨」申遣之、二月卅日親茂左衛門を右ニ付遠慮伺申出之、不及遠慮旨申遣之、

407 寛政元年十二月廿日

一郡奉行申出の、在目付三上傳藏儀、去ル十四日西館織部

殿御出仕之節、於途中無礼之儀御座の段、承知仕のニ付、急度慎の儀申付置の旨申出之、免許申付旨申遣之、

408 寛政三年二月十二日 同十六日御免、

一御旗警固佐藤傳之助・木村甚内、二ノ御丸上辻御番所當番之節、津輕主水殿江下座不仕、不届ニ付、急度呵置の旨申出之、

409 寛政四年八月朔日

一松浦甚五左衛門申出の、與力原子善八儀、去月廿一日御門番之節「不敬之儀有之、遠慮申付の所、同廿七日御免被仰付、翌日を自分遠慮伺之通申付、今日迄三日ニ相成申之間、」御免之儀伺之通被仰付之、

410 同年十月廿日 同廿四日御免、

一工藤友藏儀、御徒代目付相勤の所、御用人江心得違之致下座のニ付、遠慮伺之通、

411 寛政五年二月十六日

料

一 早道之者神市之丞、御役人様方江下座之儀心得違之儀
申上、恐入_レニ付、御奉公遠慮伺之通、

資

412

〔八〇四〕
文化元年五月十四日

一大湯五左衛門申出_レ、大組与力木村兵八郎・小山内半兵衛儀、去ル七日「武者屯當番之処、御留守居組頭沢与左衛門退出之節不_レ之儀、」御食議之処、同役急腹痛ニ而介抱之内、与左衛門罷通跡時宜「相成_レ旨申出_レ間、御奉公遠慮申付_レ旨承届_レ、」〔七ウ〕

413

同日

一 石郷岡徳左衛門申出_レ、御持筒足輕種市八右衛門儀、去ル七日御支閔前「番所當番之処、沢与左衛門退出之御不_レ之儀、御食議之処、支度」之内間取下座仕_レ旨申出_レ間、慎申付旨承届_レ、」

〔二四〕 御献上 日之丸 御進物

414

〔七七五〕
安永四年九月十四日 同廿日御免、

一 御臺所受拂役齋藤儀兵衛・丸瀬幾次郎、松前様江被進物御省略以前之格ヲ以申上、遠慮伺之通、

御臺所頭金惣右衛門、右ニ付同日遠慮伺之通、同十八日御免、」

415

〔七七九〕
安永八年六月十九日

一 御臺所頭黒瀧角左衛門・齋藤理兵衛、吟味役神又左衛門、請拂「役三人御献上漬蕨、西ノ御丸江御献上無御座儀不奉伺、右」御荷物両 御丸分相認_レ儀、不心得ニ付、遠慮伺申出之、御「用捨被 仰付之、

416

〔七八二〕
天明二年四月廿四日 同廿八日御免、

一 御臺所頭角田宗右衛門、吟味役佐藤又右衛門・神又左衛門、受拂役「中村甚兵衛、靈山院江御進物昆布不吟味ニ付、遠慮伺之通、」

右ニ付、御臺所頭黒瀧角左衛門・齋藤理兵衛_レ、遠慮伺申出「不及旨被 仰付之、

417

〔七八三〕
天明三年七月十日 同十四日御免、

一 御馬廻對馬忠八・今藤三郎、三馬屋湊目付被仰付_レ処、日之丸「御 城米入津之処、右御注進之儀心得違御取扱ニ相成_レニ付、」遠慮伺之通、

418 ^{〔二七八〕}
天明八年十月廿四日

一御書役申立ゆ、御廻船之節江戸表江被進方取扱無念仕、遠慮」伺申出之、御用捨被 仰付之、

419 同年十二月七日 同九日御免、

一御書役小笠原久藏・山本三郎左衛門、御目見之節、上々様方被進方取扱無念之儀有之、御奉公遠慮伺之通、

420 ^{〔二七九〕}
寛政四年二月廿二日

一大坂役人小見山直右衛門、同所詰合勘定小頭浅利七郎次、「近衛若君様御元服ニ付御助力金差上方之儀ニ付、^{〔八九〕}此度被」仰付ゆ御用状之趣ニ而ち、心得違之取扱ニ付、遠慮伺申出之、不」及遠慮旨申遣之、

〔二五〕 諸御禮 披露違 著服違

421 ^{〔二七八〕}
宝曆八年九月十九日 同廿四日御免、

一御馬廻富岡藏之助、屋敷拝領之御礼、御定之日限遅ク申上、御礼不被為 請ゆニ付、遠慮伺之通、

422 ^{〔二七〇〕}
宝曆十年十二月十四日

一御馬廻佐藤弥源太儀、親源左衛門隠居願之通被仰付、家督無」相違被下置、右家督御礼之儀斗申上、隠居御礼之儀不申」上、遠慮伺申出之、不及遠慮旨被仰付之、

右ニ付番頭兩人伺申出之、不及遠慮旨被仰付之、

423 ^{〔二七六〕}
宝曆十二年十二月十六日

一大目付笠原八郎兵衛・館山善左衛門、昨日入院御礼之節^{〔九才〕}御襖御」目付開キゆ儀不心附、差圖も不仕ゆニ付、遠慮伺申出、不及遠」慮、以來間違無之様申付之、

424 ^{〔二七六〕}
宝曆十三年二月十六日

一御手廻笠井碓人、五人立之御礼罷出ゆ節、六人罷出、遠慮伺申出之、「御用捨被仰付之、

425 ^{〔二七四〕}
宝曆十四年正月廿日 同廿六日御免、

一御城附物頭廣田文太兵衛、寺社方御礼之節、御帳場出席可仕処、「差懸り病氣御断申上、御用御差支ニ相成、遠慮伺之通、

426 ^{〔二七五〕}
明和二年五月十日 同廿六日御免、^{〔卷十三頁〕}

一御手廻館美文藏、病後之御礼不申上、遠慮伺之通被仰付
也、」

427

〔七七三〕
安永二年正月十八日

一諸手物頭沢主馬、去ル十二日御弓射初之席江頭巾合羽着
用之」但ニ而致着座の旨、違尊聽、無礼之至ニ思召、呵
置の樣被仰出之、」

同廿日遠慮伺之通、二月七日 御免、

428

〔七七五〕
安永四年正月廿日 同廿五日御免、

一寺社奉行米橋甚右衛門・海老名弥門、去ル九日寺社方御
礼之節、「桃井東之助急病ニ而登 城不仕、右断差出不
申内、御礼相濟呼出」之節見落仕、遠慮伺之通、

一諸手物頭小笠原無右衛門、去ル九日寺社方御礼之節、桃
井東之助「差合ホ之点羽も無之由ニ付、其通御次第帳の
書写の所、披露」〔九ウ〕名違仕、遠慮伺之通被 仰付之、

429

〔七八〇〕
安永九年六月十九日 同廿一日御免、

一御旗奉行佐藤幸次郎、養子御礼伺之儀、大目付以下無御
座の所、伺差出シ、遠慮伺之通被仰付之、

430

〔七八五〕
天明五年正月九日

一諸手足輕頭竹内渡人、今日寺社方御礼之節披露名違、遠
慮伺申出之、御用捨被仰付之、

431

同年十一月三日

一御馬廻神与三郎、御組入被仰付の節、番頭同道不致、忝
人ニ而」御礼廻仕のニ付、遠慮伺申出之、不及遠慮旨被
仰付之、」

432

〔七八〇〕
寛政二年六月五日

一御手廻工藤長七郎、〔八ウ〕
昨朔日 御着城初而月並御礼御座の
所、「當番ニ而罷在、心得違、右御礼不申上、遠慮伺申
出之、御用捨被仰付の、」

433

〔七九一〕
寛政三年十二月廿九日

一御手廻番頭瀧川藤九郎、昨廿八日當番之處、繼肩衣ニ而
罷出、遠慮伺申出之、遠慮可被仰付の得共、格段之御
沙汰ヲ以御用捨被」仰付之、

434

〔七九二〕
寛政四年八月八日

一 御手廻只今孫次郎、去朔日登 城之節ぬき麻着用御礼
罷出、無調法ニ付、遠慮伺之通、同十日 御免、(一〇才)

435 明和六年十一月十七日

一 御召馬役嶋村我右衛門、御馬事之節縮服ニ無之品着用致
シ、一 統被仰付も有之由所、心得違、不屈被思召、去
月廿九日御呵被仰付之、

右ニ付、同日遠慮伺之通被仰付之、十一月八日御免被仰
付旨申來之、

436 寛政四年十月朔日

一 白取千次郎、今日於芙蓉之間、羽黒山延命院戒乘院名
披披露申上由節、心得違ニ而 御目見由申上由段、奉恐
入由ニ付、御奉公遠慮伺之通、

437 寛政五年正月十五日

一 笹要人儀、披露違ニ付遠慮伺申出之、御規式中ニ付、格
段之ニ 御沙汰ヲ以、御用捨被仰付之、

438 寛政八年六月朔日

一 御用人津輕頼母、披露違ニ付、遠慮伺申出之、月並初而
之儀故、御用捨被仰付之、

439 寛政十年十二月廿八日

一 山屋長大夫、今日披露申上違仕、恐入由ニ付、御奉公遠
慮伺之儀、御用捨を以不及遠慮旨申遣之、

440 文化九年十二月廿五日

一 岡文次郎儀、親家督御礼御座由所、申上落仕、奉恐入由
ニ付、御奉公遠慮伺之通、尤右御礼不被為請由旨共申
遣之、

〔二二八〕 御名代 御召物

441 延享二年十二月五日 同十四日御免、

一 御目付佐藤弥五右衛門、長勝寺江 御名代御先番之処、
御名代「相済由跡江罷越由ニ付、遠慮伺之通、

442 安永三年七月廿三日

一 御旗奉行佐藤幸次郎、一昨廿一日高岡御祭礼ニ付、御
前様「御名代之処、心得違、宿坊江暮打由ニ付、遠慮伺

申出之、不及遠慮、以來心得違無之様被仰付之、

443 〔七七六〕
安永七年五月六日 同十一日御免、

作事吟味役田中傳之助、受拂役石郷岡庄助、長福寺江

御名代」之節、山門御修復ニ付仮屋見分之節、不心得之儀有之、遠慮」伺之通被仰付之、

444 〔七七九〕
安永八年七月廿二日 同廿六日御免、

一御廣敷御用違小栗山宇八郎、高岡江御部屋様御名代罷越々節、御断状不差出、遠慮伺之通、

445 〔七八四〕
天明四年十月廿五日

一寺社奉行秋元金九郎、今朝報恩寺江御名代ニ付、御先詰之外文関下座敷、報恩寺失念之処、不吟味ニ付、遠慮伺申出之、此度ハ御用捨、以來左様無之様ニ被仰付之、〔一才〕

446 〔七八八〕
天明八年七月廿二日 同廿四日御免、

一御小納戸役木村藤兵衛、大納戸役前田源次郎、御召物」御仕裁被仰付所、仕立屋鹿末之取扱ニ而御召ニ相成兼、遠慮伺之通、

右ニ付、御仕裁屋柏屋与八、同日戸ノ、八月十四日 御免、

447 同年八月廿八日 同卅日御免、

一大納戸役吉岡徳藏、御召物御仕裁被仰付々節、不吟味仕、遠慮伺之通、

御仕裁屋柏屋与八、御袴御仕裁違之処、不申上、差上、同日慎」被仰付、同卅日御免、

448 〔七九〇〕
寛政二年八月六日 同十四日御免、

一御仕裁屋柏木与八、御召物御仕裁十五日迄差上之様被仰付々處、一十七日迄運成、必竟常々等閑故、右林之儀有之、不届ニ付、戸ノ」申付旨、大納戸役江知申遣之、同七日、大納戸役前田源次郎・長谷川源藏・吉岡徳藏、御召物」御仕裁之処、仕裁屋運成相納、遠慮伺申出之、此度ハ御用捨被」仰付之、〔一一ウ〕

〔二七〕 御臺所廻

449 〔七九〇〕
宝曆十年八月廿九日 九月三日御免、

一御料理人原喜左衛門・小林庄八郎、御菓子臍饅頭、御菓子屋」仕立之処、蠅入、遠慮伺之通、

同卅日

一 御膳番須藤五郎大夫、御臺所頭三上源次郎、受拂役古川

勝左衛門、「右同断ニ付、遠慮伺之通、

九月二日須藤五郎大夫御免、同三日三上源次郎・古川

勝左衛門御免、「

同廿九日

一 御菓子屋菊屋長次、右ニ付戸ノ申付之、

九月廿九日重キ御呵之上戸ノ御免、以來急度相慎御用

向取ニ扱ハ様被仰付之、

450

〔二七六六〕
明和三年六月九日

一 御料理人加勢芳賀三四郎、御煮物之内江蠅入、遠慮伺之

通、「

但御膳番高屋惣吉、右同様ニ付遠慮伺之通、

一 御臺所頭成田是左衛門、御料理小頭高屋源太、右ニ付遠

慮〔一ニオ〕伺申出之、不及遠慮、

451

明和三年十一月卅日

一 御膳番高屋惣吉、御臺所頭成田是左衛門、御料理小頭高

橋源「太、御料理人齋藤弥十郎、御膳江切爪入ハ儀見當

不申、差上、「遠慮伺之通、

十二月九日高屋惣吉・成田是左衛門御免、同廿五日高

屋源太・齋藤「弥十郎御免、

452

〔二七六七〕
明和四年三月四日

一 御膳番外崎権大夫、御食之内江髮毛入、見當不申、差上、遠

慮伺之通、

一 右ニ付御鉢焚御盛付致ハ者、遠慮申付之、

一 右ニ付御臺所頭、御料理小頭、御料理人、遠慮伺申出之、

不及遠慮ハ、

453

〔二七七三〕
安永二年閏三月十六日 同廿二日御免、

一 御家具小頭申立ハ、去月廿八日御役人様方并三御組頭様

江御「料理被下置ハ節、御家老様方江御菓子八寸居之

処、粉付ニ仕、「一両御組頭様江盃粉付之処、御膳江打、

御留守居組頭様御用人「様方江御拳之鳥平物差出ハ節、

八寸居之処、粉付ニ仕、遠慮「伺之通、〔一ニウ〕

一 右ニ付、御臺所頭遠慮伺申出之、不及遠慮旨被仰付之、

454

〔二七八〇〕
安永九年六月廿一日

一御料理人芳賀善藏、昨日御夜食御精進ニ御座レ所、魚仕、遠慮伺之通、

一御臺所頭、御料理小頭、右不吟味ニ付遠慮伺之通、

同廿三日御臺所頭御免、同廿五日御料理小頭、御料理人御免、

455 ^{〔二七八八〕}天明八年九月三日 同七日御免、

一御膳番八木橋多源太、御試之上差上レ御酒、酢味御座レ様」被為 思召、被仰出レ趣、不吟味之段恐入、遠慮伺

之通、

御膳番、御臺所頭、御家具小頭、代ルレ遠慮伺之通

被仰付レ、

一 同六日御用人海老名弥門、右ニ付遠慮伺之通、同十二日御免、

一 同十四日御書役小笠原久藏、右ニ付遠慮伺之通、同十四日御免、

456 ^{〔二七九六〕}寛政八年七月廿日

一御膳番成田左助、御臺所頭太田市左衛門、御料理小頭須藤」新之丞、御料理人成田市之助、受拂役神傳之助より

昨晚干温鮓 御好ニ付仕立差上レ処、油之香御座レ旨被 仰出レニ付、遠慮伺申出之、不及遠慮旨被 仰付之、

同日御臺所頭レ、御素麵屋遊谷久右衛門、慎申付レ旨申出之、 ^{〔二三才〕}

457 ^{〔二七九七〕}寛政九年二月四日

一御膳番成田左助、御臺所頭原幸吉、御料理人成田市之助・」須藤要之助、昨番當番之処、 御上り方江砂入、

籠抹之取扱」ニ付、御奉公遠慮被仰付之、同十三日 御免、

一 右ニ付、板之間之者兩人、急度押込置レ様被仰付之、

458 ^{〔二八〇九〕}文化六年十月四日

一鹿内伊右衛門・笹次右衛門・竹内銀次郎・佐野忠藏、今朝御膳」差上レ節、御向江蠅入、不吟味ニ付、御奉公

遠慮伺之儀、御用」捨ヲ以、不及遠慮旨被仰付、

一 右ニ付、今朝御膳之節不吟味之儀有之ニ付、御奉公遠慮伺」夫々可被 仰付レ得共、被遊 御覽レ而已、不被召上

小間、此度ハ格段」以御用捨、不及遠慮旨被 仰付レ、此末不吟味之儀無之様被」仰出レ間、左様可被相心得

ハ、猶亦支配之者江も可被申付旨、御臺」所頭御膳番江
申遣之、」

〔二八〕 諸斷 通用 御請

〔一三ウ〕

459

寛延元年十二月四日 同廿七日御免、

一御留守居組武田力次郎、亡父藏之丞忌明御断及延引之旨
被仰渡、遠慮伺之通、

460

宝曆九年六月廿七日 七月八日御免、

一御城代津軽外記、附添御断状間違、遠慮伺之通、

461

同年七月九日 同十二日御免、

一御手廻番頭成田文左衛門、娘附添願之通被仰付ハ、御
断状差上」不申、遠慮伺之通、

462

宝曆十年二月十九日

一御目付菊池源太左衛門、繼母附添相願可申処、御断ニ而
申出之、」遠慮伺申出之、不及遠慮、

一御目付申立ハ、繼母附添御断ニ而相済ハ儀下、只今迄同
役とも」一統右之通取扱罷有ハ、依之遠慮伺之旨申出

之、不及遠」慮旨申遣之、

463

明和八年三月廿九日

一大組武頭白取数馬、母昨夜五ツ半時病死之処、則刻忌中
御断并御用番伺書差出可申処、今朝差出、遠慮伺申出
之、不及遠慮旨被仰付之、

〔一四オ〕

464

明和八年四月廿日

一御繪師今村榮理、御目付方之廻状、家來於途中取
失ヒ、遠慮伺申出之、御用捨被仰付之、

465

安永四年十二月七日

一御錠口役那奉行兼桶口弥三郎、産穢一昨日御免ニ付、則
刻御断状差出可申処、昨日御断申上、遠慮伺申出之、御
用捨」被仰付之、

466

安永五年六月三日 同七日御免、

一錠ヶ関町奉行猪俣市郎左衛門、二男附添願之通被仰付ハ
処、」御断不申上、遠慮伺之通、

料

470 同年十月十二日 同十四日御免、

一大組武頭吉村甚五右衛門、湯治追願被仰付_レ処、大目付江御断_レ相違不申、遠慮伺之通、

資

468 安永六年四月六日

一田村要七、悴月並出仕、三月朔日願之通被仰付、前晚御剪紙_レ到來仕_レ処、其節私繕ケ沢町奉行在勤ニ而罷在、御請遲_レ成可申旨、同役方_レ申上置_レ処、去月廿三日罷上_レ、未御請_レ差上不申、遠慮伺申出之、不及遠慮旨被仰付之、
〔一四ウ〕

469 安永六年十二月廿五日 同廿七日御免、

一御手廻山内庄兵衛、忌御免被仰付_レ処、出勤之御断不申上、_レ病中故出勤仕兼_レ旨、口上書を以申上、遠慮伺之通、_レ

一御手廻番頭廻間新助、右不心附ニ付、遠慮伺申出之、不

及_レ遠慮旨申遣之、

470 安永八年九月四日 同八日御免、

一御手廻笹森清右衛門、叔父忌申去月廿五日迄ニ而相済_レ

處、_レ御断不申上、遠慮伺之通、

471 安永十年四月三日

一御馬廻米沢六郎大夫、継母去月廿六日病死仕、只木孫次郎_レ服忌御座_レ所、取紛知セ不申、遠慮伺申出之、御用捨被仰付_レ、_レ

472 天明三年八月十六日 同廿日御免、

一御手廻三上傳太郎、父實方之祖母病死ニ付、忌中半減之處、_レ三十日目ニ而御断申上、遠慮伺之通、

473 天明四年正月七日 同十一日御免、

一諸手者頭豊嶋勘左衛門、継母附添御断一通申上、遠慮伺申出之、不及遠慮旨申遣之、
〔一五オ〕

474 天明四年六月廿七日

一御手廻佐藤保之助儀、継母大病ニ付、母ト申文言ニ而附添_レ御断申上之、遠慮伺申出之、不及遠慮旨申遣之、

475 同年七月三日

一 足立三藏、當月青森在番、去月廿九日罷下り御断状、

使^レ之者取落、出奔ニ付、大目付江相違不申、遠慮伺、

此度ハ御^レ用捨被仰付之、

476 天明六年五月朔日 同日御免、
〔二七八六〕

一 諸手物頭竹内渡人申出^ル、母方義絶之叔父山田彦兵衛去

ル廿七日^レ病死仕^ル儀、山田剛太郎^ノ知^ルセも無御座、昨

夜脇^ノ承、忌中^ニ御断運成、遠慮伺^ノ通、

但右返事、渡人^ノ横^ニ而差出^ル処、天明三年二月廿四日
〔二七八三〕

物頭^ノ右返事以來堅と被仰付、田中宗右衛門横之返事

御返被成^ルニ付、此度も堅^ニ而差出^ル様、竹内渡人江

横之^レ御返事相返、堅^ニ而差出^ル事、

477 同年十二月十八日 同廿七日御免、

一 御手廻番頭瀧川藤九郎、去月十七日被為成御渡^ル御書付

之写通用落^ニ而及遲滞拜見仕^ルニ付遠慮、伺^ノ通、

被 仰付之、

478 天明七年正月九日
〔二七八七〕

一 諸手物頭竹内源大夫、名改之処、大目付御目付江運成相

違、^レ遠慮伺申出之、御用捨被仰付之、

479 天明八年七月十七日 同廿一日御免、
〔二七八八〕

一 大組武頭進藤太郎左衛門、四男附添願之通被仰付^ル処、

御断^レ不申上、遠慮伺^ノ通、

480 同年十一月廿四日

一 御目付川越九郎左衛門・三上常左衛門・野上甚五右衛

門・山屋八三郎、^レ御飛脚被差立^ル儀、御奥向通用文言

間違之儀有之、^レ遠慮伺申出之、御用捨被仰付之、

481 寛政三年三月十一日
〔二七九一〕

一 町奉行高屋吾助、継母附添願之通被仰付^ル処、御断状母

ト^レ相認、病死之節、継母と御断差出^ル処、御目付方ニ而

受取不^レ申、遠慮伺申出之、御用捨被仰付之、

482 寛政五年十二月二日
〔二七九三〕

一 工藤久左衛門申出^ル、私悴金次儀去月廿一日御臺所受拂

役^レ見習被仰付^ル所、其節伯母忌中ニ而罷在^ル段、御断

申上^ル、^レ然ハ右忌中同廿四日迄ニ而相濟、廿五日^ノ御

臺所江罷出、誓^レ詞^ハも相濟申^ル、右忌中相濟^ル段、心

得違^ニ而御断不申上^ル、^レ御僉議被仰付、無調法恐入^ル
〔二七九四〕

ニ付、御奉公遠慮伺申出之、「伺之通被仰付之、
同四日悴金司^カ、右ニ付私御奉公遠慮伺之通、

483 寛政九年正月十七日

一 館美善兵衛、母方之叔父高屋吾助、親与次右衛門忌中
相濟^ル御断、日数間違相認、恐入^ルニ付、御奉公遠慮之
儀、「格段之御沙汰ヲ以、御用捨被仰付之、

484 寛政七年十一月廿四日

一 表右筆四ヶ寺江御茶被献^ルニ付、寺社奉行江通用落致^ル
ニ付、「遠慮伺申出之、格段之御沙汰を以、此度ハ御用
捨被仰付之、」

485 寛政八年九月三日 同五日御免、

一 御留守居組頭津軽大炊之助儀、御佛參之節御留守詰
之儀通用落有之、御奉公遠慮伺之通被仰付之、

486 寛政九年二月九日

一 御小性組頭申立^ル、高杉勝太郎儀、父實方之祖父高屋
吾助親与次右衛門病死、右忌半減受可申^カ、本式ニ受^ル

而、右断「御目付江差出^ル所、受取不申^ルニ付、勝太郎
カ御奉公遠慮」伺申出^ル間、右断状御目付ニ而受取^ル様
被仰付度儀、伺之通、」
〔一六ウ〕

487 寛政九年八月十二日

一 間山甚五郎、竹鼻村親類罷越度、六日之御暇願之通被仰
付^ルニ付、罷越^ル節、御断状心得違差出不申、御奉公遠
慮、「伺之通、同十六日 御免、

488 同年九月朔日

一 御手廻番頭山田一学申出^ル、長尾幸次郎親病死ニ付、同
人「忌中御断状則違可申上^ル所、心得違仕、及遲滞差上
ニ付、」御奉公遠慮伺之通、

一 右番頭代田中伴右衛門、右同様申出之、御用捨被仰付
之、」

489 同年十二月七日

一 大湯五左衛門申出^ル、異父之弟三上銳助儀、御仕置被仰
付^ル所、「右忌中御断早速差出不申、奉恐入^ル、仍而御

奉公遠慮」伺之通被仰付之、

490 寛政十年十二月廿二日

一 御目付、昨日御祝儀事并老役老人御用御座所、御城代格江通用落ニ付、遠慮伺申出之、格段之御用捨ヲ以不及遠慮旨被 仰付之、

491 文化元年六月廿九日

一 御目付山口勝右衛門申出、昨晚於寺社奉行宅ニ申渡出席〔一七〇〕御用御座所而、私罷越相勤申、右御用相濟御達不申上旨、御尋被仰付、奉恐入〔一七〇〕ニ付、御奉公遠慮伺之通、

492 文化五年三月四日 同八日御免、

一 津軽元太郎、祖母附添願之通被仰付、其節御断状差出可申、心得違差出不申、恐入〔一七〇〕ニ付、御奉公遠慮伺之通、

493 文化十年四月廿二日

一 成田勝藏、母附添下并私病氣下共願之通被仰付、罷下

所、「病氣ニ付直ニ附添養生仕間、母附添之御断不申上、心得」違恐入〔一七〇〕ニ付、御奉公遠慮伺之通、

〔二九〕 刀 鞘走 慮外

494 延享元年九月十九日 十月朔日御免、

一 御手廻奈良只之進、氣色勝不申、押而登 城之処、眩暈強、不思刀指御廣間迄罷上り、遠慮伺之通、

495 宝曆八年七月二日

一 御手廻山屋安次郎、今日御礼之節、芙蓉之間ニ而脇差鞘走、遠慮伺申出之、不及遠慮旨被仰付之、〔一七〇〕

496 明和七年六月廿一日 閏六月三日御免、

一 御馬廻小山市太郎、風氣之処、初而 高覧ニ付、押而致出勤所、「病中故、与風心得違、 御城中江刀を引付置申度段、大目付江」内意申上儀、御尋ニ付、遠慮伺之通、

497 安永二年閏三月十六日 四月十六日御免、

一 御手弓足輕三浦半藏、於湯治先、諸手物頭毛内又左衛

料

門江」對シ數度慮外致ル由相違、不届ニ付、急度呵置、
押込置」ル様申遣之、

資

498

〔二七七四〕
安永三年十月六日

一御小性組佐藤斧吉、御先手燭持參仕ル所、帶刀仕間敷
御場所迄帶刀仕、遠慮伺申出之、御用捨被仰付之、

499

〔二七八五〕
天明五年九月三日

一御留守居組唐牛九右衛門、和徳町傳次郎と申者江異論
之儀ニ付、委細申出之趣、頭方ニ而聞届置ル様申遣之、
右傳次郎儀、御家中江對シ無礼之儀有之、不届ニ付、呵
置ル様申遣之、

500

〔二七八九〕
寛政元年三月朔日 同八日御免、

一御用所坊主福土玄智、於御用所、御目付小山五左衛門殿
〔一八才〕
江無調法」仕ルニ付、遠慮伺申出之、申付ル旨承届ル、

一九六

〔二二〇〕 認違 遅滞 不吟味 不心附

心得違 御書物

501

〔二七七七〕
享保二年五月六日

一御手廻与方三浦惣右衛門、杉沢弥兵衛、昨五日二ノ御丸
南御門」朝五ツ時八ツ時迄相動ル所、心付不申、大門
開キ不申、」呵置ル旨申出之、

502

〔二七七〇〕
明和七年六月四日

一御右筆長尾安左衛門、大道寺族之助殿江御剪紙認違、
遠慮伺申出之、不及遠慮旨申遣之、

503

〔二七七三〕
安永二年二月四日

一 小野道秀、御薬調合不心付之儀仕、遠慮伺申出之、不及
遠」慮旨申遣之、

〔一八ウ〕

504

安永二年五月十九日 同廿六日御免、

一町年寄松井助右衛門、御觸書数日遅成、遠慮伺之通、

505

〔二七七八〕
安永七年十一月八日 同十日御免、

一勘定奉行〔秋〕杯元金九郎、大封物到着之節、御用番掛リ讓ニ相成、遅成、遠慮伺之通、

同日 同十四日御免、

一勘定人且代吉藏・工藤太次郎、大封物ニ而到着之 御輿御用物及遲滞、御食議ニ付、恐入、此以後夜中到着ニ而も早速「差上ル様可仕ル間、御免被成下度旨申出之、頭方ニ而急度呵」置ル様申付之、

506

〔七八〇〕
安永九年三月七日 同九日御免、

一留書表右筆今井文右衛門・小林忠之丞・棟方七右衛門、御褒「美被下方御目錄調籠末之取扱ニ付、遠慮伺之通、但十日ノ忠之丞七右衛門相愼、同十二日御免、尤七右衛門御馬廻」格ニ付、申渡之部ニ有之哉と食議申付ル所、安永六年八月「四日御廣敷御用達遠慮御免之節、手紙ニ而相済ルニ付、」此度も手紙ニ而申遣之、

507

〔七八二〕
天明二年十二月三日

一勘定奉行手傳小山内新吾、御廻船上乗之者御賞之儀、江戸〔八九才〕勘定奉行ノ申來ル御用状、数日遅成相達、不将ニ付遣「慮伺之通可被仰付ル得共、御用捨ヲ以、不及遠慮旨

申遣之、」

508

〔七八三〕
天明三年五月七日

一日記役ノ御食議物被仰付ル処、御近例御座ル処ヲ古キ御〔八、九〕御例申上、遠慮伺申出之、御用捨被仰付之、
一御日記物書ルも同様申出之、御用捨被仰付之、

509

同年五月廿二日 同廿八日御免、

一高岡祭司役諏訪門兵衛、高岡小人并作人共松伐取願之儀、再應奉願ル得共、御沙汰無御座内、右之者共、及「餓」死ル旨、達而相願ル由ニ而、願高之内拾式本伐取セ〔九〕ルニ付、」遠慮伺之通、

510

同年六月三日

一寺社奉行對馬武左衛門・秋元金九郎、貞昌寺ノ心悅心安大姉御年忌先々留書ホも無分明成儀申出ル処、不吟味ニ付、遠慮伺申出之、不及遠慮旨申遣之、

511

〔七八七〕
明和九年四月六日

一熊野宮御本社葺替之儀、〔殿〕取勝院ノ可申出筈之処、

神主方申出、寺社奉行不心附、遠慮伺申出之、御用捨被仰付之、
〔一九〇〕

資

512 天明五年七月八日〔七七八五〕 同十日御免、

一留書表右筆中田彦左衛門、古懸 不動尊御出行ニ付、五
山江」之御祈禱之儀、御用状差出不申、遠慮伺之通、
右ニ付御用人松浦甚五左衛門、遠慮伺之通、同日 御免、

513 同年七月十日 同十二日御免、

一表右筆相馬又次郎・齋藤福之丞、御用聞違之儀ニ付、遠
慮伺之通、

514 天明七年正月十八日〔七八七〕 同廿日御免、

一御用人工藤傳兵衛、役拔之書付取扱聞違之儀ニ付、遠慮
伺之通、

515 天明八年六月十八日〔七八八〕

一御近習醫者中丸昌庵・小野道秀・上原玄永、昨日被為
召所、遅刻仕、御間欠ニ相成、遠慮伺申出之、御用

捨、以來左様」無之様被 仰付之、

516 寛政元年四月朔日〔七八九〕

一町奉行土岐渡人、傍嶋源八郎、昨廿九日訴状箱取扱之
所、急ニ病氣ホニ而時刻遅成、遠慮伺申出之、此度ハ
御用捨被仰付、

517 寛政二年二月十八日〔七九〇〕 同廿二日御免、

一書物預高屋市兵衛、隠居願書付御渡之処、不吟味ニ付、
遠慮伺之通、
〔二〇一〕

518 寛政二年十月十九日 同廿七日 御免、

一書物預高屋市兵衛、御陸尺御給分御食議之処、不吟
味之儀申上、遠慮伺之通、

同廿七日

一右同藤林兵次郎、同役御用向不吟味之儀ニ付、遠慮伺之
通被」仰付所、私湯治中ニ付取扱不申得共、元帳書
入落、不心付ニ」付、遠慮伺之通、

519 安永三年十二月十六日〔七七四〕 同廿二日喜兵衛御免、

522

寛政二年八月七日
〔二七九〇〕

一大納戸役前田源次郎・長谷川源藏・吉岡徳藏申出、柏屋〔二一〇〕与八江 御召物御仕立被仰付所、日限遅成相納、同人戸〔二一〇〕被仰付ニ付、御奉公遠慮伺申出之、此度ハ御用捨被仰付之、

521

寛政元年七月廿八日 八月朔日御免、
〔二七八九〕

一作事受拂役古川三郎次、拝借之御書物痛損、其假上納被仰付度旨申出之通、右ニ付遠慮伺之通、
〔二一〇〕

520

天明四年五月廿八日 六月朔日御免、
〔二七八四〕

一諸手物頭足立三藏、組足輕明跡江、長柄之者赤平幸七ト申者、一段取間も無之、殊ニ長柄奉行江問合も不致、申立〔二一〇〕段、心得違〔二一〇〕ニ付、遠慮伺之通、
一御代官唐牛序左衛門〔二一〇〕も、右同様伺申出之、伺之通申付之、同廿八日御免、

526

同年十二月廿九日

一諸手物頭白取千次郎儀、昨日驚之間當番之処、心得違〔二一〇〕ニ而引取〔二一〇〕段、恐入〔二一〇〕ニ付、遠慮伺申出之、御用捨被仰付之、

524

同年二月廿一日

一成田勘兵衛申出、公義浦御触取扱〔二一〇〕搔抹ニ付、遠慮伺申出之、御用捨被仰付之、

525

同年十一月朔日

一笹森三左衛門粹藤次郎儀、劍術 高覧之節、切組帳認違〔二一〇〕ニ付、慎伺申出之、不及慎旨申遣之、但、書付御目付宛所ニ而申出之、

523

寛政四年九月五日 同九日御免、
〔二七八三〕

同六日柏屋与八戸〔二一〇〕被仰付、同十四日御免、
一外崎文四郎儀、宇田平館湊目付揃勤被仰付所、病氣ニ付〔二一〇〕伺も無之、同役申合罷上〔二一〇〕段、心得違仕、遠慮伺之通、

料

527

〔二七九六〕
寛政八年正月廿一日

一 町奉行、大津屋嘉右衛門入牢之節、心得違ニ而寵忽之取扱有、之由ニ付、遠慮伺申出之、御用捨被仰付之、

資

528

同年六月廿九日

一 山田剛太郎、去月十四日 御着城之節、御家老御用人退出、無之内、武者屯御門飾相支舞由ニ付、同日當番之大組与力、遠慮申付旨申出之、

529

〔二七九八〕
寛政十年八月三日 同七日御免、

一 勘定人丸瀬嘉市、去月廿一日御扶持米渡之節、御藏奉行江「手紙認違有之、遠慮伺之通、

530

同年十二月朔日 同十一日御免、

一 薄田多門・岡本兵馬、去月廿七日講釈相濟、頂戴物御礼ニ浪之間江罷通、心得違ニ付、遠慮伺之通、
同日御目付今兵部左衛門、寄合菊池幸八、御中小性小山倉藏・三上定次郎、右ニ付遠慮伺之通、同十一日御免、

531

〔二七九九〕
寛政十一年八月十六日 同廿二日御免、

一 御目付間宮金大夫儀、當六月廿一日御徒小頭川口兼吉當番之處、〔二一ウ〕出番不致儀、早速可相違處、翌朝食議之上申上由ニ付、遠慮伺之通、

〔三一〕 誓詞 御飛脚 登

532

〔二七四九〕
寛延二年二月九日 同十七日御免、

一 表右筆田中与四右衛門・毛内安右衛門、鷺之間誓詞前書并宛「所間違、遠慮伺之通、

533

同廿九日 三月七日御免、

一 御右筆諏訪宗右衛門、誓詞取扱間違之儀有之、遠慮伺之通、

534

〔二七六〇〕
宝曆十年九月二日

一 御右筆佐々木作大夫、毛内安大夫、両御組誓詞之節、名前書「違、遠慮伺申出之、此度ハ御用捨被仰付、

535

〔二七六七〕
明和四年三月廿六日

一 御手廻田村鉄五郎、御藏立合誓詞被仰付由處、腹痛強、

540

〔二七七七〕
天明七年二月十八日 同廿四日御免、

539

〔二七八三〕
天明二年九月三日 同六日御免、
一 今別町奉行出町久弥、御検見人扣誓詞之節、書判血判共居所違、遠慮伺之通、

538

同年八月廿五日
一 表右筆藤林兵次郎、評定所誓詞取扱鹿ニ付、遠慮伺、御用捨被仰付之、

537

〔二七七三〕
安永二年閏三月十六日 同廿二日御免、
一 御小納戸一戸八之丞、藤田形右衛門、御先荷江詰合之御反物之内、心付不申、御登セニ仕、遠慮伺之通、

536

〔二七六九〕
明和六年二月七日 同九日御免、
一 御中小性頭黒石軍兵衛・成田茂左衛門、當御供登御中小性登一順差上之節、佐藤吉之丞無足勤之者ニ御座之通、不申上、遠慮伺之通、

543

同十八日 同廿九日御免、
一大組足輕横山喜藏、小寺伊八、去ル朔日江戸之御飛脚

542

〔二七八八〕
天明八年十一月三日
一 諸手足輕藤田助太郎・加藤善六、江戸表之御飛脚ニ而罷下リ之通、日數遅成之ニ付、呵置之旨申出之、承届之、
同九日右不屈ニ付、長柄之者江御役下被仰付之、
但安永五年六月二日杉山千吉郎之、組秋元兵次郎加役誓詞不相濟所、相濟之旨申上、遠慮伺申出之、不及旨被仰付之、

541

同年八月十七日
一 御馬廻組頭高倉主計之、御馬廻浪岡甚藏加役誓詞相濟之通、不相濟旨申上、遠慮伺申出之、不及旨被仰付之、
取扱方ト心得違、遠慮伺之通、

料

日數」遲成到着ニ付、呵置_レ様申遣之、

544 天明八年十二月廿日 同廿三日御免、

資
一御目付秋元兵次郎、去ル十二日鱈御荷物之節、御書役_レ之」御用状差登セ不申、此度雉子御荷物ニ而差登セ御用支ニ付、」遠慮伺之通、

545 寛政三年二月廿九日 三月四日御免、

一諸手足輕三浦清三郎・成田八太郎、御飛脚ニ而罷下_レ所、及遲」滯到着ニ付、呵置_レ旨申出之、承届_レ、〔二三才〕

546 寛政三年六月廿五日

一諸手物頭笠原兵司、去月十三日立御飛脚名前違ニ而碓ヶ關切手紙受取_レ、不吟味ニ付、遠慮伺申出之、御用捨被仰付_レ、」

547 寛政八年八月十二日

一棟方作右衛門申出_レ、當秋小泊湊目付御人目論先日伺之節、」七戸権右衛門湊目付誓詞未相濟不申_レ所、間違ニ而相濟_レ段」申上_レ、數多之御人目論之事故、間違之儀

恐入奉存_レ、御」聞届被仰付度旨申出之、多膳江違、承届旨申遣之、」

548 寛政九年正月十三日

一工藤五右衛門・船水新五兵衛申出_レ、旧冬中田七左衛門御廣敷御用違被」仰付_レ間、御役誓詞之儀去月私共御用番談合之節申繼、」名前落ニ相成、不吟味之段恐入_レニ付、御奉公遠慮伺申出之、」御用捨被仰付_レ、但右兩人御目付役也、」

549 寛政十年六月二日 同十二日御免、

一寄合佐藤只右衛門今日御役誓詞被仰付_レ所、間違之儀有之、」引取被仰付_レニ付、遠慮伺之通、

550 享和二年十月二日

一成田六左衛門、今日於誓詞席間違之儀有之、御奉公遠慮之儀、御」用捨ヲ以、不及遠慮旨被仰付之、

551 文化六年二月廿二日

一藤林久大夫、昨日於評定所物頭受之誓詞御座_レ所、宛所

認違「恐入_レニ付、御奉公遠慮伺之儀、御用捨被仰付之、」

〔三二〕 御藏 御鍵 湊 順違 目論違

552 延享元年六月十八日 同廿日御免、

一 御小納戸一戸弥源太、笹森佐右衛門、御小納戸御用ニ付、北之丸御「土藏江罷越、内戸ノ外戸ノ_レ節、御鍵入_レニ付、遠慮伺之通、」

553 宝曆十二年正月廿日

一 御手廻田中太郎五郎、床前御藏立合病氣代被仰付_レ處、病氣ニ付右御用 御免之儀、御藏開御用向御間合之考も無之申立_レニ付、遠慮伺申出之、御用捨被 仰付之、

554 明和七年十月五日

一 勘定奉行相馬作左衛門、御用番順間違申上、遠慮伺申出之、「不及遠慮旨被仰付之、 (二四才)

555 明和八年二月十七日

一 御馬廻組頭堀弥三郎、十三中賦御藏奉行目論之通被仰付

「_レ處、心得違、別人申付_レ、依之右目論之者可被仰付哉、申付_レ者居リ」可被仰付哉、伺申出之、右別人居リ申付之、右ニ付、遠慮伺申出之、「御用捨被仰付之、」

556 明和九年二月廿六日 同廿日御免、

一 御臺所頭成田是左衛門、御家具之者御人目論不心付之儀有之、「遠慮伺之通、」

557 同年四月八日 同廿七日御免、

一 御手廻岩崎勘助・御手廻原子弥太右衛門・外崎兵馬、去々年「木作御藏相勤_レ所、御米駄下方間違之儀有之、御取扱ニ相」成、遠慮伺之通、

558 安永二年八月廿七日 九月五日御免、

一 勘定小頭長内喜左衛門・菊池左内・太田幸次郎、去々卯年大坂「詰合之_レ處、御金藏江盜賊入、御金紛失ニ付、遠慮伺之通、」

559 安永三年六月廿七日 同廿九日御免、

一 御書物預花田金十郎、巽御矢倉御鍵入、錠おろし_レニ付

遠慮伺之通、

〔二四ウ〕

560

〔七七九〕
安永八年二月十九日

資

一御手廻菊池鉄之助、八幡御藏立合相勤罷有レ所、母方之叔父相馬作左衛門御役下ニ付、遠慮伺申出之、不及遠慮一旨被仰付之、

561

〔七八三〕
天明三年七月六日

一御馬廻三浦又三郎、青森御藏相勤レ節、鉛（一、二、三）小旗御廻船送状江書入レ様ニ被仰付レ所、右御用状紛失書入不申、御一取扱ニ相成、遠慮伺申出之、御用捨被仰付之、

562

同年十月十三日 同十五日御免、

一碓ヶ關御飯屋奉行千葉助太郎・小山内清藏、同所御町藏壁切破、御米紛失之所、早速見出シ得共、御米入不レ足ニ相成、遠慮伺之通、

563

〔七八五〕
天明五年正月廿七日

一浪岡御藏立合笹森文左衛門、御藏奉行伊東勇助、同所御藏被切破、御米紛失之処見出シ得共、御藏被

切破レニ付、遠慮伺之通、

但同日伺之通被仰付レ得共、浪岡御藏ニ罷有、同廿九日罷上リ、「同日（ハ）慎、二月朔日御免、御藏奉行角田字右衛門、遠慮」伺申出レ得共、同人儀御用透ニ付申合、弘前江罷上リ居レニ付（一五オ）」不及遠慮旨被仰付之、

564

天明五年二月三日 同七日御免、

一炭御藏請拂役平川字十郎、去ル卅日夜同所御藏江盜賊入、御用錢紛失ニ付、遠慮伺之通、
一同七日同役外崎久太郎、遠慮伺之通、同十一日 御免、
一同二日同所御藏見継御馬廻与力三上吉大夫、右ニ付遠慮伺之通申付レ旨、御馬廻組頭松浦甚五左衛門（ハ）申出之、同七日「御免之儀、申出之通、右見継吉大夫遠慮ニ付、同所御藏（ハ）」合之儀申出之、受拂役泊番申付之、

565

〔七八六〕
天明六年正月十三日

一青森湊目付一戸定右衛門、故障之儀有之、引取被仰付レニ付、「遠慮伺申出之、不及遠慮旨被 仰付之、

566

〔七八九〕
寛政元年十一月廿二日 十二月七日

一 梨田九左衛門、平館湊勤中、水主御役錢不案内ニ而上納方間違之」儀申上、遠慮伺之通、

567 〔七九〇〕
寛政二年九月十日 同十六日御免、

一 表右筆中田鉄藏、御用所御薬文庫空錠仕、遠慮伺之通、

568 〔七九一〕
寛政三年二月十三日

一 御目付秋元木工右衛門、射藝高覧帳出順間違之儀ニ付、
〔二五ウ〕
遠慮伺申出之、御用捨被仰付之、

569 寛政三年八月十五日

一 床前御藏立合井上斎、御藏勤中不メ之様ニ被及御聞、御
食議之處、委細御答之趣御聞届被仰付、御取扱ニ相成
ルニ付、「遠慮伺申出之、御用捨被仰付之、

570 〔七九二〕
寛政四年九月五日

一 御召馬醫奈良兵吉申出ル、御召馬附小人明跡御座ルニ
付、「御繰上願差上ル節、名前違申上ル段、恐入、遠慮
伺不及、」

571 同年十二月十七日 同廿三日御免、

一 釜泡惣左衛門、此度母衣月湊目付被仰付ル所、内々難澁
ニ付」旅行支度ホも相成兼、早速罷下可申躰無座ルニ
付、難澁」之趣申上、湊目付 御免之儀奉願ル段、不敬
之儀申上ル旨」被仰付、奉恐入ル、依之御奉公遠慮奉伺
旨申出之、多膳江」違之、伺之通申付旨申遣之、

572 〔七九三〕
寛政五年二月十七日 同廿一日御免、

一 去々年大瀬与三太、高杉御藏勤中、駄下方之節あら米
多、不吟味ニ付取扱ル所、以 御憐愍御用捨被仰付旨被
仰」渡、恐入ルニ付、御奉公遠慮伺之通、

573 〔七九七〕
寛政九年三月十三日 同廿三日御免、

一 小山内清之丞儀、油川湊目付被仰付、在勤之所、松前之
伊三良」船沖船頭蟹田町傳次郎と申者、旧臘廿五日於油
川湊」酒積入出帆之所、廻り切手之表ル過積有之、段々
御食議」之所、船頭願ニ任セ過積致セル由、御印を以
致沖出ル品、」自分聞届之上過積致セ、不埒之取扱ニ
付、湊目付引取」之上、御奉公遠慮被仰付之、

料 同年六月七日

一 山田永之助儀、長柄明跡有之由ニ付、御持鐘ヲ申立由節、御「持鐘奉行江間合無之、心得違ニ付、違慮伺之通、

資

575

寛政十一年五月廿四日 六月廿四日御免、

一 成田兵之助・石郷岡幾次郎、去寅十月卯九月迄上納方御金「奉行相勤、跡役江仕切渡手形之内、阿部喜右衛門預手形廿四枚」之表過メ有之、跡役申出ニ寄、御詮議之處、右手形之表ニ而ハ「過メ可有之由得共、申繼之詠有之段申出由、左由ハ、右之詠仕切帳江」書記可相渡處、無其儀、無念之至ニ由、依之御奉公遠慮被「仰付之、

576

享和二年九月廿九日 八月六日御免、

一 八木橋市郎儀、去酉年浪岡御藏詰合相勤罷有由所、青森御藏江駄下米之内あらさくつ交リ、御廻米難相成旨返り米ニ相違無「之旨申出由、然ハ御藏勤方之儀毎々以御定も有之處、等閑」之勤方、御取扱ニ相成、不埒之至ニ由、依之急度可被仰付由共、「以 御憐愍被仰付之、」

奉行宮館久藏・櫻庭俊藏、右同断、

577

文化元年四月廿日 同廿六日御免、

一 立合進藤多吉郎、浪岡御藏勤中、去十二月同所御藏江盜賊忍「入、御米錢紛失無御座由得共、御取扱ニ相成、恐入由ニ付、御奉公遠慮」伺之通、奉行小山内軍次・岡本形七、右同断、「

578

同年九月廿三日

一 御目見以上御留守居支配工藤元弥儀、當二月中迄炭御藏受「拂役懸り合之所、組合同役山形久弥差合中、老人勤之砌、炭五百」俵余之代錢算違ニ而過受取致由ニ付、右代錢上納致度「旨申出由、必竟等閑之勤方右林之儀有之由間、急度可被」仰付由得共、御用捨ヲ以、慎被仰付之、」

579

文化二年正月十六日

一 御藏立合廣田東馬、奉行野呂直衛・佐々木作大夫、金木村「御借上在藏江御米積入由所、去ル八日類焼ニ付、御米焼失」ニ付、御奉公遠慮之儀、以 御用捨不及遠慮旨

被仰付之、

580

〔二八〇七〕
文化四年五月十七日 同廿四日御免、

一種口丈左衛門・葛西十助儀、鯉ヶ沢湊口御役之内、御定役錢より「過取立之上、町茂合補ニ致旨相聞得、御金議被仰付所、先年」勘定奉行江も相違而取立旨申出、同所江も金議申「付所、右祿承届儀無之旨申出、然ハ前々湊方御役錢」御定も有之ニ付、一旦間違之取扱共、早速相改可申之処、「不筋之取立方、是迄年來其假ニ致置儀、支配所取扱」向等閑ニ有之、不届ニ付、急度慎被仰付之、

〔三三三〕 田方 山方 屋敷 夜廻 養子

581

〔二七七三〕
安永二年十月十七日 同廿一日御免、

一町奉行桑田五左衛門・角田弥八、此度三国屋権四郎繰替山之儀ニ付、「逸々御不審之趣、恐入、遠慮伺之通、

582

〔二七七五〕
安永四年十一月十五日

一高岡祭司役訪職門兵衛、屋敷御棹違無御座所、心得違御改之儀申上、遠慮可奉伺得共、未御改無御座内、差

扣申、必竟心得違ニ御座旨申出之、諸役人出會之上、相改儀、延「引被仰付旨申遣之、

583

〔二七七八〕
安永七年七月朔日 同十日御免、

一御手廻笹森清右衛門、去ル廿五日夜丑ノ刻夜廻之処、心得違相廻「不申、遠慮伺之通、

584

〔二七八一〕
天明元年十二月廿七日

一堀五郎左衛門、弟得一郎、奈良岡太左衛門方江養子願之通被「仰付、同人方江去ル廿日引取申、御届申上所、此節病中ニ付」伺之上差遣可申處、心得違不奉伺差遣、遠慮伺申出之、御用「捨被仰付之、

一奈良岡太左衛門、悴得一郎引取儀、右同断ニ付、遠慮御用捨、

585

〔二七八六〕
天明六年九月十三日

一諸手物頭竹内渡人、田方開筭方之儀ニ付、往々御取扱ニも可罷「成、尤故障之儀も御座間、右地面人馬家屋敷共仕付假「差上度儀、再應申上之処、故障一通今更申上之儀、御聞届」難被為成旨被仰付、恐入、遠慮伺申出

之、御用捨被仰付之、

586

〔七九〇〕
寛政二年八月八日 同十四日御免、

一 御留守居支配町奉行所物書加役藤田弥四郎、屋敷願本〔二八才〕役之頭江不差出、加役頭町奉行江差出、屋敷物頭被仰付所、御留守居組頭吉村場左衛門町奉行所物書引取セ弼議之處、心得違ニ付、遠慮伺申出之、伺之通申付之、

一 町奉行所物書町田半兵衛、右取扱方不心付ニ付、遠慮伺之通、

587

〔七九七〕
寛政九年十一月廿二日

一代官川田忠八・佐藤圓次郎・外崎新左衛門、當畑方御檢見御手當引願、御大法御座所、遅成申上之儀ニ付、遠慮伺申出之、格段之御沙汰ヲ以、御用捨被仰付之、

〔三四〕 諸渡物 押物 御用達

588

〔七七三〕
安永二年三月九日 同十四日御免、

一 勘定人菊池専右衛門申立、黒瀧光悦江戸拜借金過引ニ付、渡方之儀伺之上相渡可申処、伺なく相渡、遠慮伺

之通、

589

〔七八〇〕
安永九年五月十四日

一 御用達竹内伴左衛門、此度船手之者共大勢 御城下江罷上リ御取扱罷成、不取扱ニ付、遠慮伺申出之、不及遠慮旨被仰付之、

〔二八ウ〕
但御用達遠慮伺 御用所江差出シ部ニ無之得共、舟手之者共 御城下江罷出騒々敷儀ニ付、御用所江相違之、

590

〔七八三〕
天明三年七月十二日 同十六日御免、

一 勘定人成田文次郎、去江戸詰中、小細工人御扶持渡方間違、遠慮伺之通、

591

〔七八四〕
天明四年七月十七日

一 御用達池田善七、當時御用要御金錢御差支ニ付、此順氣ニ而ハ當秋造酒も可被仰付ニ付、為御用弁、酒屋共江御切手紙買入之儀申聞段、被仰付も無御座儀、心得違、遠慮伺之通、

一 御用達阿部藏之助、右同断ニ付、遠慮伺之通、

但八月十三日重キ御呵之上遠慮 御免、同十五日右被
仰渡」恐入、池田善七、遠慮伺之通、同十七日御免、

592 〔七八五〕
天明五年十二月十四日 同十九日御免、

一勘定人古川善司・百田要藏・蝦名方之助申立也、當春建
部菊大夫「秋田表江罷越也節、略用過渡ニ付、遠慮伺之
通、」

593 〔七八四〕
天明四年二月十三日

一御手廻神定右衛門、御扶持米名之關届ニ而、一戸定右衛
門悴受取」由、同人江申遣也所、弥受取也ニ付、同人
方受取申也管ニ御座也、

右之儀ニ付、段々御取扱之儀申上、遠慮伺申出之、不及
遠慮」旨被仰付之、

594 〔七八六〕
天明六年八月六日

一御馬廻黒石直八、於石渡村鑿ヶ沢江仕切錢不案内ニ而取
押、」御取扱ニ相成、遠慮伺申出之、不及遠慮旨被仰付
之、」

〔三五〕 組支配

595 〔七八五〕
天明五年七月廿三日 八月七日御免、

一高岡祭司役諏訪門兵衛申立也、高岡下役三人初役ニ付折
々」間違之儀有之也ニ付、為」呵置也旨申出之、

596 〔七八二〕
天明二年三月朔日

一大組武頭沢主馬申立也、大組与力三上郡次、去十二月十
六日入牢」被 仰付、跡廻所被仰付也所、右家建具不取
荒也儀、再應御」僉議被仰付、御取扱ニ相成也ニ付、遠
慮伺申出之、此度ハ御用」捨被仰付之、

597 天明五年十二月十日

一町奉行成田保次郎・佐々木四郎兵衛、荷賣頭石場屋次郎
右衛門・荷賣」播磨屋清三郎儀ニ付、御僉議方不吟味之
取扱仕、遠慮伺申」出之、御用捨被仰付之、

598 〔七八三〕
天明三年四月十五日

一長柄奉行大湯勘左衛門、組之者御給分間違申上、遠慮伺
申出、御用捨」被 仰付之、

料

599

〔二七八八〕天明八年十二月廿一日

一 御臺所頭黒瀧寛左衛門・斎藤理兵衛・角田宇右衛門、支配之者永之」御暇被下置ルニ付、遠慮伺申出之、御年始御規式ニも相成ル間、「御用捨を以、不及遠慮旨被 仰付之、

資

600

〔二七九五〕寛政七年五月卅日

一 御手廻組頭松浦甚五左衛門、御手廻重田左仲御役下ニ付、遠慮」伺之通、

但甚五左衛門儀、寛政六年九月御手廻組頭被仰付、左仲十一月御不」審有之ニ付、右之通被仰付ル、九月以前之御不審ニルヘハ、伺不及」差出、先祖之頭差出被伺付ル筈、尤罪相頭ル節之頭伺差」出ル筈、仍而者右罪相頭ル以來、其頭役拔致シ、後之頭茂」取扱有之節ハ、兩人共同差出ル様、猶又罪之初発不相知時ハ、」當頭斗伺差出ル筈被 仰付ル、

〔三〇才〕

601

〔二七八九〕寛政元年七月十日

一 大組武頭足立又右衛門、組足輕永之御暇被下置ルニ付、遠慮伺申」出之、遠慮被仰付ル部ニ有之ル得共、此度ハ

602

〔二七九四〕寛政六年二月七日

別御用被仰付ル間、「格段之御沙汰ヲ以、不及遠慮旨被仰付之、」

一 御中小性見習柿崎兵助儀、親藤四郎永之御暇被下置ルニ付、「兵助儀茂永之御暇被下置ル、右ニ付、頭遠慮伺之通被 仰付ル、」

同七年三月六日御中小性見習斎藤金次郎儀、親兵右衛門」御役下ニ付、退役被仰付ル間、頭遠慮伺之通、

603

〔二七九五〕寛政七年十月廿二日

一 菊池太兵衛儀、寛政六年御留守居組被仰付、同七年二月先役勤中之儀、御不審有之、一昨廿日御役下被仰付ルニ付、「右頭山野十右衛門遠慮伺之通、

但十右衛門儀、天明五年正月御留守居組頭被仰付之、

同日

一 御留守居支配廣船徳次郎儀、寛政四年加代官被仰付、同七年二月御不審有之、一昨廿日永之御暇被下置ルニ付、右頭足立」又右衛門遠慮伺之通、

但又右衛門儀、寛政五年三月御留守居組頭被仰付ル、

604

〔一七七七〕
寛政九年八月廿八日

一 御留守居支配相馬兵司儀、寛政五年五月、郡所物書相動
い所、同七年二月御不審有之、一昨廿日御役下被仰付〔三〇ウ〕
ニ付、右頭「豊嶋勘左衛門遠慮伺申出之、不及差出旨書
付相返之、」
但勘左衛門儀、當八月十五日御留守居組頭被仰付、
右ニ付、吉村場左衛門遠慮伺之通、

一 御目見以下御留守居支配佐々木源之助儀、寛政四年十一
月深「浦町同心警固代加勢被仰付、同七年九月引取被仰
付い処、當「七月勤中仕上勘定之儀ニ付、深浦町奉行ニ
而食議之処、御「米引負有之ニ付、一昨廿六日御給分拾
俵被召上、御長柄之者」役下被仰付いニ付、

當五月御留守居組頭被仰付、 當頭 棟方 角之丞
天明五年、寛政八年六月迄
御留守居組頭相動い、 先頭 山野十右衛門

右兩人御奉公遠慮伺申出之、取扱無之ニ付、不及差出
旨、書付「相返、尤御食議方之儀、深浦町奉行江被仰付、
當頭江御食」議不被仰付いニ付、右之通被仰付い、

605

〔一八〇一〕
寛政十三年二月廿四日

一 御留守居支配笠井兼藏儀、無調法之儀有之、御役下被仰
付いニ付、」
〔三一才〕

當正月御留守居組頭被仰付、 當頭 沢与左衛門
遠慮伺差出、右書付不及差出旨、相返之、
當正月御馬廻組頭被仰付い得共、去
秋兼藏江御不審之節取扱有之、
先頭 西館 宇膳
遠慮之儀御用捨被仰付之、

606

〔一七九二〕
寛政四年十二月十七日

一 高屋半左衛門申出い、御留守居組釜沓惣左衛門湊目付御
免願「不敬之申出、不吟味ニ付、遠慮伺申出之、御用捨
被 仰付之、」

607

〔一七九五〕
寛政七年十二月廿七日 同廿九日御免、

一 毛内有右衛門儀、組足輕白石久左衛門追放ニ付、遠慮伺
之通り、」

但五日以上ニ而 御免之部ニい得共、年頭ニ抱いニ付、
御沙汰之上、」三日目ニ而 御免被仰付之、

料

608

〔二七九六〕
寛政八年七月廿七日 同卅日御免、

一山野十右衛門、先支配工藤要助追放ニ付、遠慮伺之通、

但明朔日重キ御祝日ニ付、不拘先格、四日ニ而御免、

資

〔三一ウ〕

寛政八年八月廿八日

一山野十右衛門、先支配工藤要助追放ニ付、遠慮伺之通、

但明朔日重キ御祝日ニ付、不拘先格、四日ニ而御免、

一山野十右衛門、先支配工藤要助追放ニ付、遠慮伺之通、

但明朔日重キ御祝日ニ付、不拘先格、四日ニ而御免、

一山野十右衛門、先支配工藤要助追放ニ付、遠慮伺之通、

但明朔日重キ御祝日ニ付、不拘先格、四日ニ而御免、

寛政八年八月廿八日

一山野十右衛門、先支配工藤要助追放ニ付、遠慮伺之通、

但明朔日重キ御祝日ニ付、不拘先格、四日ニ而御免、

一山野十右衛門、先支配工藤要助追放ニ付、遠慮伺之通、

但明朔日重キ御祝日ニ付、不拘先格、四日ニ而御免、

一山野十右衛門、先支配工藤要助追放ニ付、遠慮伺之通、

但明朔日重キ御祝日ニ付、不拘先格、四日ニ而御免、

一山野十右衛門、先支配工藤要助追放ニ付、遠慮伺之通、

但明朔日重キ御祝日ニ付、不拘先格、四日ニ而御免、

一山野十右衛門、先支配工藤要助追放ニ付、遠慮伺之通、

但明朔日重キ御祝日ニ付、不拘先格、四日ニ而御免、

一山野十右衛門、先支配工藤要助追放ニ付、遠慮伺之通、

但明朔日重キ御祝日ニ付、不拘先格、四日ニ而御免、

一山野十右衛門、先支配工藤要助追放ニ付、遠慮伺之通、

但明朔日重キ御祝日ニ付、不拘先格、四日ニ而御免、

一山野十右衛門、先支配工藤要助追放ニ付、遠慮伺之通、

但明朔日重キ御祝日ニ付、不拘先格、四日ニ而御免、

一山野十右衛門、先支配工藤要助追放ニ付、遠慮伺之通、

但明朔日重キ御祝日ニ付、不拘先格、四日ニ而御免、

一山野十右衛門、先支配工藤要助追放ニ付、遠慮伺之通、

但明朔日重キ御祝日ニ付、不拘先格、四日ニ而御免、

訂正 (八) 第十七号

一三六頁上段 九行目ルビ 一七六一 ↓ 一七六二

一三七頁上段 五行目ルビ 一七七五 ↓ 一七八四